
転生人生【極悪ノ道化】

シュマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生人生 【極悪ノ道化】

【NZコード】

NZ5631N

【作者名】

シユマ

【あらすじ】

ハンター世界に舞い降りた悪魔
彼はどう動くのか！

そんなに壮大ではないが原作をブレイクしていくます

悪魔と（笑）ふわふわさん（漫畫家）

いろんなのを見つけてあなたに感謝を

悪魔と（笑）とわたし

血と硝煙の匂いが立ち込める室内で、俺は一人ぼっちだった。

正確には俺が四肢をぶち抜いて髣つた男がいるのだがそろそろ死ぬと思つので気にしないことにする。

なにやらひめを声で言つているが、聞き流す聞いてやるほど俺は優しくないのだ。

そういえばここいらのせいだなと考え部屋の隅で血溜まりに沈む男と俺の足下で呻いている男を見下した。

俺の名前はヒソカ・七歳だ。前世では学生をしており受験まじかの高校三年生だった。

みなさんお気づきの通り、そつ転生である。テンプレと少しづれた感は否めないが、事故死だ。

死んだあの日、バスで帰宅途中の俺はバスジャックにあった。バスに乗っていたのは18人・俺と犯人と運転手、うちの学校の柄の

悪い三年男子五人と

三年女子一人、犯人に向かつていつた後輩男子四人と後輩女子三人に女性が一人だ。

あのバスジャックで死んだのは、17人・犯人と向かつていつた四人と見ていた12人で、運転手は隙をみて脱出していつた。

バスはそのままガソリンスタンドに突っ込んで乗っていた人は死亡したと……で転生したらしい。

何故らしいかというのは、今回俺を襲つた奴が神様にあつてそう聞かされたと言つてている。

俺の足元で死にかけてるのが、神様にあつた奴だ。なんでも犯人に向かつていつたメンバーは能力を貰つてトリップしてきたそうだ。

そして隅に転がっている死体はあの犯人である。なんだか知らんが神様がついでに送つてきたらしい……まあこいつのお陰で助かつた。

俺が家で内職（転生先は貧乏なのだ。）をしていると突然笑いながら突っ込んできたのだ。こいつの後ろからきたトリッパーと一緒に弾丸を浴びせ（こいつは胸に、トリッパーは腕に掠つた。）とつさに隣の部屋に飛び込んだ。

俺が飛び込む寸前、こいつの身体とさつきまで俺が立っていたところが裂けた。

壁に何かがぶつかる音と俺が構えるのとトリッパーがやってくるのはほぼ同時だった。

俺がこいつらがここに来るのが予想外だったようだ。こいつらもおれがここまでやれるとは思わなかつたようだ。

-念能力《伸縮自在な愛・バンジーガム》を床に張り踏んで隙ができたところで足を打つ！！

トリッパーの最後の攻撃 - 倒れながらも襲ってきた。その手に持つ刃物（短刀かな？）ではなく腕をバンジーガムで絡みとり、弾丸を腕に打ち込み相手の持っていた刃物で、四肢の健を切つた。

何故こうも上手くいったのか？…それは幾つかの条件の上で起きた必然、偶然が重なつた結果だった。

まず俺がヒソカそのものではなく転生者で念能力が使えたこと。

トリッパーじゃなくてこいつが先行してたこと。

二人とも完全に油断してたことやこいつが能力者で無かつたり、トリッパーが近接能力（トリッパーの野郎『直死の魔眼』なんて物騒なものだった。）だったこと

家が貰い込んで中が薄暗かつたりと俺に凄い有利だった。

「さてと、何か言い残すことはあるかい？トリッパー君。」

足元の彼は、口を震わせた。

「た、助けてくれ……。」

その声に力は無かつた。

「ダメだよ。君は俺を殺しに来たんだ。」

彼はやつぱりかと呟いた後に

「化け物め……。」といった。

「化け物？……違う俺は、悪魔だ。」

と俺が言つたら

彼は、あ、悪魔たんと言つて笑つた後、俺に殺してくれと頼んできた。

「いいよ。」と俺は言つて一思いに喉を切り裂いた。

SIDEトリッパー

俺を見下ろしているガキがいる。

そのガキは恐ろしいほどの判断力と身が凍え死ぬようなそんな冷たい眼をしていた。

そのガキはこの狂つた『HUNTER×HUNTER』の世界で重要な位置にいるヒソカという少年で転生者だった。

俺がすべて情報を吐き出すと彼は困ったようになんでそこまで話すのかと聞いてきた。

俺は死にたかったと言つてやつた。能力のせいで狂いそうだった
と、でも死ぬ勇気もなかつた

彼が遠回しに心の準備ができたか聞いてきてもさうしただけ話
したい僕も遠回しに言つと断られてしまつた。

やつぱり、彼は厳しく優しい、僕がズルズルと先延ばしにしよう
とするまるで先生のように諭してきた。

僕が言つたネタにも乗ってくれた。僕はそれが可笑しくおかしく
て笑つてしまつた。

僕は彼の後ろ姿をみながら、友達になりたかつたとか、彼は二〇
厨かなとか、あの三人は浅かつたなーとか

無性になきたくなつた。

考えるんじやなかつた。

SIDEトリッパーEND

珍獸・怪獸

財宝・秘宝

魔境・秘境

『未知』という言葉が放つ魔力

その力に魅せられた奴らがいる

人は彼等をハンターと呼ぶ

そしてプロハンターの必須技能『念能力』その可能性は限りない

そんなものが跋扈するハンター世界

オリ主たちは生き残れるのか全員出られるのか

悪魔と（笑）ともわかる（後書き）

読んでくれたあなたに感謝を

なんかわかりずらくなつてしましました

そのまま改編します

八年目の原作（前書き）

ちょっと飛んでフラグ立てと不定期過ぎる更新ですみません

八年目の原作

どうもヒソカです。八歳になりました。ええ、前回犯人（バスジヤックの犯人）とトリッパーが襲ってきてから一年です。

今回ついに！原作キャラと会えました。いやまさか、天空闘技場で生活費を稼ぎつつ、原作を待とうとしたら、飛行船で隣に座つたんですよ。

誰かと言うと……モタリケさんです！なんですか？ゾルディック家とかジンとかビスケとでも思つてたんですか？甘いです、そんなことしたら他の転生者に気づかれるでしょう！

「どうしたんだ？ヒソカ具合でもわるいのか？」

「いや、大丈夫だよ。モタリケこそ顔青いよ。」

「情けないが、船酔いしたよ。俺は寝てるけど、何かあつたら起こしてくれ。」

「ああ、ゆっくりしてて。」

モタリケ：いい人なんですが、此処がハンター世界だったのがいけなかつたみたいですね。あと色々一年でわかつたんですが、どうやら世界の修正力？みたいなのがあつて、すごい戦いたいです。ホモつけは無いのが救いですね。で、原作の人達と戦つてみたいので、ヒソカっぽい口調と動きの演技をしてます。

それで前回のトリッパーの情報を信じるなら、彼の能力は直死の魔眼で能力をくれたのは神（若い美青年らしい）で、神の目的は狩り、つまり転生者を世界に入れてから自らの手で狩ること、だから

17人を殺したのは、神だつた。犯人の精神を誘導して、転生者をつくるらしいことを神本人が、トリップさせる前に宣言したらしい。

で四人で考えて、神をその場で殺そうとした。だけど、考えてもみろ、おかしいだろ？わざわざ四人にましてや能力を決める前にいうなんてさ。案の定、罠だつた訳だ、あの直死もちのトリッパーに能力が暴走するように細工してあつた。結果、四人の内一人が死に、一人が神に操られ、二人はちりじりになつたということだ。

あいつが笑つて死んだわけは、やつと呪縛が解けたからだつた。死んだトリッパーの能力は『属性を操る程度の能力』らしい、これで狂性を与えたから、今は神の思考力がかなり落ちてる。あの犯人は、その影響が出ててだから笑つてる。他の…

「…………。」フルブルツ

「モタリケ…はい袋。」

「あつありがt。」エロエロー

モタリケのせいでの話が折られたけど、他のトリッパーの能力は会えたら説明することにする。

まあ、彼からの情報はこれくらいだね。できれば、敵？をとつて上げたいところだけでもう念能力出来てるし、うん他の人に任せようかな。

とりあえず今後の方向性としては、まずヒソカとして生きる。それから、折をみて他の人と接触してできれば神とやらを倒すでいいかな。

そろそろ、目的地に着くから、モタリケを起こそう。

「モタリケもつそろそろ着くつて。」

side モタリケ

俺はしがない運び屋のモタリケだ。今日も荷物を運ぶため飛行船に乗り込んだ。運び屋としては乗り物に酔いややすいのは致命的な気がしないでもない。

それでだ、俺はアマチュアハンターで念も少しは出来る。だから後から乗り込んできた子供が念能力者で俺より遙かに強いつてわかった。最初は関らないようにしてたんだが、故郷にいる弟達を思い出して声をかけてしまったんだ。

「どうしたんだ坊主飛行船は初めてか？」

「ええ、初めてなんでドキドキします。」

青い髪の少年は、ちょっと緊張してたみたいで話しかけられてホッとしたように見える。

それで自己紹介を兼ねつつ、少年を探つてたんだが、こいつ普通にいい奴だ。無意識か分からんが要所要所に気遣いが入つている。老人に席を譲ったり、子供が走り回つていたらそれとなく注意する。そんなことする奴は始めて見たぜ。

「俺はモタリケって言つんだが、親御さんはいないのか？」

「ボクはヒソカです。自由気ままな一人旅ですよ。」

「……。」

「どうしたんですか？」

「敬語はやめてくれ体がムズ痒くてしようがない。」

「えつと、じゃあモタリケ、これでいい？」

「ああ、それでいい。じゃあ俺はいくから。」

「じつ話してみると隙が全く無いな、これなりほつといても大丈夫そうだな。さてと喫煙所にいくかな。

「なあ、何でついてくるんだ？」

「モタリケの後について行つたら色々と便利そうだなと。」

「いつ…腹黒！話しかけたのは間違いだつたか。ヒソカの野郎、俺にパラサイトする気かそはせんぞ！」

「なあ、ヒソカ俺は仕事があるから、オマエに付き合つてられないとんだ。」

「大丈夫、勝手に憑いてくから。」

「金は出さんぞ！」

「だから勝手に憑いてくつていつてるだろ。」

だめだ、説得失敗した。力ずくでとめようとしたら逆にやられるに決まつてゐるし、どうしようもない。あとついてくつて発音がおかしい気がするぞ。まあいい、ヒソカなら自分で何とかしそうだからな。

「わかつた、好きにしてくれ。」

「いきなり、折れた！」

「その代わり、俺に念をおしえてくれよ。」

「うーん、別にいいですよ。」

それにしても、ヒソカは何でそんなに強いのかが不思議だ。

八年目の原作（後書き）

読んでくれてありがとうございます。この話は「都合主義」につきこの後、フラグが回収し切れない可能性が大です。最後にこの話は私の妄想なので是非原作で目立たない人が目立ちます。

運び屋モタリケと幼女と乱入者（前書き）

更に、飛びます。空白の時間はそのうち外伝とかしたいです。どうも思ったように人を動かせません。

運び屋モタリケと幼女と乱入者

side モタリケ

どうしてこうなった！後ろから迫りくる巨大な獣が俺達に飛び掛る。

「モタリケさん！」

「こいは死んだかな？（モタリケが）

「（あつ俺、死んだわ。）」

俺の逃げる先にいる、少年と少女の声を聞きながら。俺は諦めた。

数時間前、おれとヒソカはザバン市から北にしばらく行つたところにある。キボウ港という裏では盗品やら「禁制の物が出回る流通ルートの要と言えるところだ。つまり、ここには仕事が溢れてる。十老頭の誰だか忘れたが、此処を仕切つていて治安もまあまあいいが、此処で気をつけるのは此処のトップの奴の部下と警察だ。此処の警察は腐っている。もうぐぢやぐぢやになつていて、どちらかといふと十老頭が抱き込んだ、警察が犯罪者だ。

「ねえ、モタリケちょっと闇市見に行つてるから。」

「ああ、別にいいけど。問題に巻き込まれんなよ。」

「モタリケこいを氣をつけなよ。」

身長が殆ど同じになつた（俺が170ちょいでヒソカが160後半だ）ヒソカが市場に向かつて歩いていく、ヒソカに有つてから5年位か、速いもんだな。この5年で念がだいぶ強くなつたが、あつたばかりのヒソカにはまだまだ届かない。荷物を抱えて裏路地に入り、臭い道をかなり歩いたところに目的地はある。

「（shoomジームス…ジームス元気かな。）」

「誰だ？」

「俺だ、モタリケだ。例の荷物を持ってきた。」

ジームスの店は珍しい物を捌いている。たとえば、神字の本であつたり、念の籠つた美術品でだつたりする。ジームスの依頼は千耳会を通してでしか受けられない。ある一定の信用と念関しての知識が必要らしい、俺が受けるまでは荷物に被害が出てたらしい。俺は逃げ足が速くなんだかんだいって荷物は届くので信頼性が高いらしい。なぜ、らしいのかといふとヒソカから聞いたからだ。

「（にしても、ヒソカと仕事をしてから楽になつた。ヒソカには並みの相手じや敵わないし、俺も修行をつけてもらつた御蔭で、さらに逃げ足が向上した。ヒソカには感謝だな。）」

「じゃあ、荷物は確認し終わつたから、報酬は口座に入れてくれぞ。」

「わかった。」

「あと、いま犬が市場にいるから、行くなら氣をつけろよ。」

ジームスが言つた、犬は警察のこと。つまり今、闇市付近で暴れまわつてゐる。普段なら近づきもしないのだが、あそこにはヒソカがいる。最近、ヒソカの奴バトルジャンキーと化してゐるから、警察とかコハコニティー（十老頭の部下）に喧嘩を売りかねん。急がねば！

side change ヒソカ

適当に金をスリから巻き上げながら、市を見て回る。ここには、なかなか面白い物が出回ってる。食べ物、衣服、武器や麻薬等様々だ。だけど、奴隸やらの人身販売、高価な盗品は裏でも奥のほうに行かないと出会えない。

「今は犬はブルックス通りから此方に来ているそうだ。他にはダービーがかなりの大物を運んでいて、ハンズの店に面白い物が入荷されたらしい。」

「それで。」

「1000ジユニーだ。」

「……。」スツ

「グリードアイランドだ。買い手はまだらしいが、欲しいなら今之内だ。」

「じゃあね。」

「フフ、また御贋原に。」

情報屋のプッチにそういうつて出る。プッチは自分が気に入った奴にしか情報をくれないし、ボクがあつたのも偶然だった。グリードアイランドか…ここでとれるならモタリケとは、これでお別れかな？

「（ハンズの店はどこかなつと）んつ？携帯だ。モタリケからか…へいへいど「ヒソカ！たすけてくれー今俺は。『ガシャンー』ツーツーツー」はあ？

携帯が切れた…どうやら、騒ぎに首をつっこんだらしいな。今度はなにに関つたんだ？『ミコニティーのブツでもかつぱらつたか？

サイレンの音が聞こえたから警察かな、自分で問題起らじてたら世話ねえな。

「警察は、ブルックス通りだつたかな？」

「ビンゴー」さつちのようだ。店のガラスが割れてるさつきの音はこれか……あつモタリケの携帯が落ちてる。さてなにがあつたのかな？ ちょっと誰かに聞いてみるか

「すみません、ここで何があつたんですか？」

「つ！ なんだ、子供か。いやな、犬がダービーのところに噛み付いてよ、モタリケをダービーの娘が巻き込んで一人で逃げてつた所よ。いや、あの娘ちゃんやるねえ。」

「（何してんだか……）ありがとう、それ買うよ。」

「まいど！ あとダービーの車の方には行くなよ。まだ犬がいるからな。」

露天商のオヤジから卵を買うと、すこしげんなりした気分で、モタリケを追うために近くにあつたパトカーを借りることにした。コミニュニティーに比べ撒けばいいので楽かな？ 通りから出ると銃声が聞こえた。

「（いたいた……警察はあそこか）轢き逃げダイナミックーー！」

「ヒソカー？」

「わっさと乗つて！ そつちの子も。」

なんとか、ジェームスの店に行けた。パトカーは乗り捨てた。さてなにがあつたやら……モタリケに聞かないとな。

「全く何やつてんだか。」

「すまねえ、助かつたぜ。」

「……で何があつたんだ?」

「いや、ヒソカを探してたらこの子に巻き込まれた。」

あつさりというが、ぜんぜん情報が伝わってこない。ホントに巻き込まれたみたいだな。

「お嬢さんの名前は?」

「レルート。レルート・ダービーです。このオジサンが勝手に連れて行つただけです。」

「ちよつ!？」

「（なるほど、悪女になりそつだ。）モタリケニー何してんの?」

「ちつ違う、拉致されてるのかと思って身内を装つたら、相手が警察で……。」

いや、ホント何してんの?モタリケ、そういうえばダービーの娘ってことは大物が何か知つているのかな?

「ねえ、レルート。レルートはお父さんの運んでいた荷物のこと何か知つてるの?」

「……聞いてどうするんですか。」

「単に興味があるだけだよ。」

「『ブラットコート』です。まだ若いですけど。」

「えーと、それはまじなの?」

「まじです。」

『ブラットコート』それは、ハウンドウルフと呼ばれる。大型の肉食獣でとても深い深雪の森林の奥地に極少数で存在する。第B級

危険生物に登録されていて、知性が高くそれでいて残忍だという。
『ダービーの車の方には行くなよ。まだ犬がいるからな』もしかして、ヤバイ？

運び屋モタリケと幼女と乱入者（後書き）

3～4話は前後編です。みんなレルートのこと覚えていませんか？可愛いですね。私は結構脇役が好きなんで他では見ない人を出したいですね。モタリケの念能力は乗り物酔いをしないのと乗り物に乗ったときに乗り物を強化する『運び屋伝説 - ワイルドレーサー』です。地味に役に立ちます。でもきっと空気、ちなみにモタリケは放出系です。

運び屋モタリケと幼女と乱入者 後編

side レルート

わたしのお父さんは運び屋です。いつもは細々とした依頼を受けていますが今回は大口の仕事でなんと！かの有名な暗殺一家ゾルディック家のペットの輸送です。ペットといってもそんな可愛い物ではありません。化け物です。餌をやるのに特殊な檻に入つたこいつにスコップで投げ入れます。

「くくく、何か高そうな物を運んでいるじゃないか。」

「そうだな、なあダービーこれは調べないといけないな。」

「それとも、通行料でも払うかい？」

でも蛆虫どもに集られ、お父さんは負傷し、私は危なく連れ去られようとしたところにモタリケさんに助けられ、モタリケさんの仲間？のヒソカさんに荷物を聞かれ慌てているのを見ていたら、二人共どこかに行ってしまったのでお父さんのところへ行こうとしたら。

「ガロロロロロロロロ…！」

「ナン・・・ダト・・・！」

うちの荷物が此方を見ていて、驚いていたら横からバイクに乗つたモタリケさんに抱えられ、離脱できたと思ったたら、すごい速さで荷物が追いついてきて、また引っ張られたと思つたら今度はヒソカさんの腕の中で何がなんだかでも一つだけ分かることがある。

「モタリケさん！」

「これは死んだかな？（モタリケが）

「（あつ俺、死んだわ。）」

モタリケさん、さよなら

でもそろはならなくて、乾いたパンツで音と鈍い音、後から聞こえた泣き声どうやらモタリケさんは助かったらしい、見知らぬ青年がさつきまで荷物がいたところに立っていた。それから私はお父さんを見つけ荷物を回収し、三人と別れて船に乗った。

「もう疲れた…色々ありすぎて付いていけない。」

寝る前に思ひうけれど、また会えるかな？あつたら御礼を言わなくちゃね。

side change ヒソカ

そいつが現れたのは唐突だつた。ボクたちがちまちま囮になつて港から引き離そと（ボクはそのまま戦つた方が良いって言つたんだけどモタリケは…）して狼？が止まってどこかを見ていてその先をみたらレルートがいて、ボクがレルートを確保しても時は既に時間切れ、ボクが卵を投げるもモタリケのバイクを切り裂いて、あわやモタリケエになると思つたら、そこにいた。

気がついたらそこについて、その手に持つた釣竿の糸で狼？の首を括り、近くの街灯に引っ掛け狼？の首吊りが実現した。どうやら釣竿全体に周がされているらしい、ボクはそいつと今すぐにでも戦い

たかった。でもとりあえずモタリケを助けてくれたことにお礼をい
つた。でも

「バスジャック以来だね。」

と返された。そいつが転生者なのはわかつたがその返しはどうか
と思う。たぶん恐怖で気絶したモタリケをジエームスのところに連れ
て行つて（レルートはそいつが送つていつた。狼？を担いで）そい
つを路地で待つことにした。

「待たせたな。」

「いや、別にいいよ。」

緩い笑みを浮かべた、そいつに即効でバンジーガムをつけ、こつ
ちに引つ張り、堅で殴つたというところでボクの意識は闇に包まれ
た。

「起きたみたいだね。」

「（拘束されてないし、敵じゃないか…話を有利に進めようと
先手を打つたはずなのに、なにをされたのかすらわからないとは）。」

「君をのして22分だ。気分はどうだ？おれはマキオ、ジャポン
から来た。前世の名前は佐久間修一だ。呼ぶときはマキオの方でな。」

「ボクは知っていると思うけど、ヒソカ、前世は竹中義人。」

佐久間修一、三年にいたな。文芸部に入つていて、本屋の息子、
何で知ってるかというとボクをオタクの人生に巻き込んだ文芸部の
友人の格闘ゲームの師匠らしい重度の格ゲーマニアのことだ。

「君はＴＳしないみたいだね。」

「君はつてことはしているのがいるのか？」

「そうだね、おれは君を含めて11人と会っている。内三人がＴＳして、憑依が三人の内一人が君だ。」

それよりも気になることがある。何故此処にいたのか、タイミングよく現れることが出来たのかだ。

「マキオ、何故此処にいるんだ。」

「どうしたんだい？」

「ボクがここにいることをなんで知っている。あのタイミングは不自然だ。」

「…君はどれくらい知っている？此処が狩猟場だつてことを。」

その後、活発な意見交換をし、かなりお互いの認識の差を埋めた。今、僕達が置かれている立場、危険性、原作との剥離についてなどだ。

「つまり、もう原作との剥離は始まっている筈だと。」

「補足しよう、君がヒソカに憑依している。これは立派な変化であり、予兆だとどこかでズレが生じ、キメラアントの王の性格や強さが変わってもおかしくはないし、もつと強大で恐ろしい物がいてもいい。」

「このまま、放つておくと？」

「この世界の管理人の神は、トリッパーにより狂ってるぞ。それこそ愚問だね。」

僕達は深々とため息をついて、この先どうしていくか考えを煮詰めることにした。その結果なにやら、重大なことやら面倒なことやらが発覚したが正直どうすれば良いやら、取り合えずマキオは普通

とは違う独特な人だとわかつた。

運び屋モタリケと幼女と乱入者 後編（後書き）

モタリケ……でした。きっと出番ないでしょう。レルートもな
い、次も速めに上げたいです。

読んで下さったかたに感謝を

閑話休題 モタレル（前書き）

閑話休題 モタレル

Side モタリケ

「モタリケ社長！次の商談について幾つか相談があるので御時間宜しいでしょうか。」

「わかつた、後で社長室に来なさい。」

「はい！では失礼します。」

若い男が離れていつた。名前なんだつたかな？うへん、名札とか名刺をつくつたら楽かな。

D & M運送会社、最近出来た会社で各地にいる。運び屋や運送会社を統合合併し、運送ルートの一本化を掲げ、より安全より速くを実現した。マフィアンコノミニティーを後ろ盾にわずか数ヶ月の間で急成長し、十老頭でさえ迂闊に手が出せないようになつており、手を出すよりも素直に献金を受け取り不可侵を貫いた方が利益が大きく、そのために会社に協力する者もいる。このような仕組みを考え、作り上げたのは9歳の女の子だつた。

「（俺が社長か：最初は小さかつたんだがレルートに任せたら、こんな大会社に成るなんてな）なあ、レルート副社長。」

「何ですか、モタリケ社長。」

「別になんでもない。」

「なら仕事をしてください。まだまだ安定とは言いがたいんですから。」

よつた勢いでやつてしまつたおかげで『責任取つてください』といわれ（勿論、レルートの親のティエビスとは、血反吐くほど殴られ

た）真面目に働くとデイビスと運送会社を建て気がついたらレルートが「ミコニティーと交渉して協力させて、内心戦慄した。ヒソカにあつて以来だ、そういうえばヒソカ元気かな？メールはするんだけど。ちなみにロリコン鬼畜社長として、両親や兄弟に罵倒されたときは泣いた。その後レルートに慰められてまた泣いた。嬉しくなんかないぞ！ただ自分が情けないなと思つただけだ。ホントだよ。

side change レルート

モタリケ達と別れ、少ししてまたモタリケと再開することができた。高鳴る胸、これは恋！？モタリケは特別カッコいいわけでも、優秀なわけでもない、敢えて言つなら優しいかしら？それは置いといて私は速攻で策を練つたは、結論は私に手を出させたらモタリケの事だから責任を取る筈だと、だから催淫剤と身体が元気になる薬を飲ませて、三日目にお酒を飲ませたら襲い掛かつてきたわ。かなりしぶとかつたわ、それから会社を大きくして置くと。

つまり、私はモタリケに子供に手を出すといつ罪悪感、大会社という責任で首輪をつくり逃げられないようにしたの。最近は笑いかけてくれるから、心を許してゐみたいよ。

「なあレルート副社長。」

「何ですか、モタリケ社長。（あとは子供をつくりたら、もうモタリケは私のものね。フフフ、待つてねモタリケすぐに大きくなつて貴方を満足させてみせるわ。）」

「別になんでもない。」

「なら仕事をしてください。まだまだ安定とは言いがたいんですから。」

そう私はいちゃつけるへりゃ、私達がいなくとも成り立つようこ
しないとね。

閑話休題 モタレル（後書き）

はい、五話はモタリケとレルートのその後です。原作との相違点は、モタリケはグリードアイランドに行かず社長に、レルートは捕まらず、精神科医にもならない。

レルートはヤンデレ異論は認める。

今後もちょいちょいこんな話を挟んでいきます。他に誰かクロロに憑依とかキメラアントに転生とかマイナーキャラ再構成とか書きませんかねえ。

電波少年の神様暗殺計画 前編（前書き）

こんなはずではなかつた。なぜこんなキャラに。
はい、6話です。ヒソカ視点が多くなります。やつと主人公みたい
になつたかな。

Side ヒソカ

やあ、第一回ヒソカレポートの時間だよ。一回目？一話のことだよ。今回はマキオとの会話で分かったことをまとめていくから、準備はいいできたかな？前回は原作との剥離の可能性のはなしだった。おさらいすると、まず神（この世界の管理人）が暇つぶしに来訪者（トリッパー、転生者、憑依者）をハンター世界に入れて狩りをしていた。今回は僕達17人が標的となつた。尚、バスジャック犯は神の駒であつた。4人がトリッパーに内、1人が死に、1人が精神操作されていた。マキオは11人とあつており、彼は12人の事を知つている。9人の転生者と3人の憑依者の内、3人がTSしていることをだ。合わせて17人のことがわかつた。

次にボク達を不自然なタイミングで助けられたことだが、そのことは彼の猫（念獣のよう）で、彼の説明では探知系と思われる。（）が教えてくれたといつているが、果たして此処まで正確に分かるだろうか？彼は強化系らしく、ボクを倒した能力と合わせるのなら難しいと思う、よつて彼には以下の可能性がある。その1、かなり厳しい誓約をしている。その2、彼の念能力は念獣だけでボクを倒したのは違うもの。その3、ボクに嘘をついており、強化形ではない。その4、実は偶然で電波少年。その5、17人とは関係の無い介入者。その6、彼はトリッパーだった。

上から考えてみるけど、その1は1番ありうるが難しいだろう。その2は前世は超能力者だったとかでこっちでも使える…無いなこ

れは無い。その3、これは具現化系とか操作系かな？これはある気がする。その4、これだったら考えても無駄だね。これだったらやるせないから無しの方向で。その5、これだったら他にも来てる人がいるかも、でもあの神が見逃すか？その6、……無いな。まず姿が違うし、後輩でもないし、先輩だし、1番ないな。

結論、マキオすごい怪しい、というか怪しすぎて逆に怪しくない。これが証拠過多か…ちなみに今はマキオが発見保護した転生者とボクみたいに誘われた転生者が集まる場所に向かうため、飛行船に乗っている。そして、マキオは猫に向かつて祈っている。あれは何なのだろうか？誓約に関係あるのだろうか。それとも、まさか実はその4が正解なのか…。

「ああ、死を祈ろう、死を讃えよ、死は幸いなり、死を誘つものよ、幸いの地へ誘つておくれ。ああ、生を祈ろう、生を捧げよ、生は禍なり、生を与えるものよ、禍の地へ墮しておくれ。ああ、導くものよ、あなたに感謝と憎悪を。ああ、照らすものよ、あなたに正と負を。」

マキオは邪神を信仰しているのだろうか？気にしたら負けだ。

結局、マキオは飛行船を降りるまで祈ったり、猫と話したりしていた。あんまり、話は出来なかつたな。飛行船を降りたら、迎えが来ていた。金髪にスーツでスタイルが良い、美人さんだった。

「あつー・マキオさん、こっちですよ。あれ？こっちの方は誰ですか。」

「ヒソカっていう、まあ俺達の仲間だよ。」

「へー、そーなんですか。わたしスパーつていいます。宜しくお

願いします。」

「 よろじく（まだ仲間じゃないんだけど、まあいいかな。）スパーさんは、ハンターハンターの」と知らないの？」

「 へえ？」

「 彼は憑依者なんだよ。ヒソカは有名なキャラでね。」

「 あ～、私と同じですか。」

同じ？スパーって原作にいたかな？え～と覚えてないな。

「 ヒソカ、スパーってのは、ハンター試験でイルミにやられちゃつた人だよ。」

「 そうなんです。殺されかけついでです。マイナーキャラなんです。」

「 はあ。（なんか、イメージがどんどん変わる人だ。）」

「 そうだねえ、可愛しきだね。よしよし、大丈夫だよ。」

「 あわわー、慰められましたー。悔しいけど、嬉しいですー。マキオさん、結婚して下さい。」

「 だが、断る！」

「 振られちゃいましたー。」

「 「 あはははー。」」

いや、ホント何なのこの人たち、電波と馬鹿女がいけやつこてる。

「 スパー、戻ったよって、またかよくやるよ。ホントにウザいつたらありやしない。なつあんたもそつ思つだろ。」

「 あなたは？」

「 ああ、悪いな。俺はフランクっていうんだー。よろじくー。」

「 ボクはヒソカだよ。」

今度は、馬鹿そただけど明るい感じがする。茶色い髪を立たせた

浅黒い肌の人好きのする兄ちゃんだった。正直まともそうでもほつと
している。

「おい！マキオ、スパー！いちもつじてないでサッサと車に乗り
な。」
「はーい。」
「ボクはどこに乗つたらいいかな。」
「悪いことはいわねえ。助手席にしな。」
「やつぱりか。」

フランクと二人でため息をついた。後ろの席であいつらはコント
を続いている。すごいムカつくね、爆発しないかな？いやマジで。

電波少年の神様暗殺計画 前編（後書き）

中篇は、アジトからヒソカ視点からです。まだ、わたしが書きたいところまでいきません。困りました。

side ヒソカ

みんなのピエロ（原作的な意味でかませ犬）ヒソカだよ。マキオとスパーの惚氣を聞きながら、車に揺られ4時間やつと着いた。彼らのアジトの一つ、これあれだよね。幻影旅団のアジトだよね。なにしてんのー馬鹿なの！…どうやら此処をアジトの一つにしたのはマキオらしいもうアイツは何考へてるんだか。でメンバーにマキオの事を聞いたんだけど。

「マキオさんは、私が拉致されて、笑つてゐる人に殺されそうになつたところを助けてくれたんです。恩人なんです。」と言つたのが色々残念なスパー

「いや、俺もたすけてもらつたんだ。悪い奴ぢゃねんだが、ムカつくよなやつぱし。」と言つたのが笑顔が眩しいフランク、今度飲みに行こうと約束している。

「悪い人ぢゃないんです。ただ、見せ付けなくともいいじゃないですか…。悪い人ぢゃないんですよ。ええ、ボクも助かりましたし、でも…。」と言つたのが、暗い顔でメイド服を着たメディア、彼女はT-S転生で結構ひどいところで生まれたらしい。

「あいつのこと氣にしてたら、日がくれつぞ。」と言つたのが、渋面で着流しのマサムネ

、彼はジャポンに生まれ、独学で念を修め、氣味が悪がれて捨てら

れたらしく、ドライな人だ。

「敵ではないのですから良いですか。」と言つたのが、メガネでイケメンなアーテル、かなり良いとこの坊ちゃんに生まれ厳しく躰けられたらしい。

「…………恩人。」と言つたのが、ロリ体系のポンズ、3人目の憑依者でクリツとした田に茶色の猫毛で可愛らしい顔立ち、実家は養蜂家。

皆マキオに関しては恩義を感じてるみたいだけど、変人認定されている模様。あと他の転生者は念が使えなかつたり、今のお家に愛着が湧いて、此處で普通に暮らしている。なので、ネットで情報のやり取り以外は殆ど干渉してないそうだ。トリッパーの一人は偶に来るらしい。

「あの……マキオ、ポンズは何でボクを凝視しているんだい？」

「好きなんじゃねーの？「何で！」それより俺たちの今の問題であり、敵であるの神を倒す計画がある。」

「はい！それは何ですか？マキオさん。」

「いい質問だよ。スパー、後でジュークを奪つてやるつ。計画はいたつてシンプル！ただアイツを此處におびき寄せて、殺すこれだけだ。」

「オオー、流石マキオさん！」

何を言つてるんだろうか？それが出来たら苦労だろうに、おつフランクが質問するみたいだ。

「いや、無理だろ。」

「ふむ疑つてゐるみたいだね。この中でアイツに襲われた、ある

いは攻撃されたものはてをあげてくれ。

「何があるのか？」

「上げてもらつたら分かるよ。」

メディア以外全員が上げた、これが何があるのだろうか？アデルは何か考え込むようにしている。

「君たちが最初に襲われたのは念を覚えて、少ししてからだ。念を覚えてない人は今のところアイツと遭遇していない、さらに念を覚えてから襲われるまでの時間とヨークシンから君たちが住んでいた所までの時間 + 襲つた後のインターバル一月で計算するとほぼ一致する。」

「つまり、次はメディアだといいたいのか？しかしメディアは念を覚えてからもう半月以上経つぞ。それは無いんじやないか。」

アデルはそう言ったが、インターバルのことを忘れている。ボクは他の人が何時襲われたか分からないがボクは昨日襲われた（ダービー家にいやもんをつけた警官に神の手先が居たらしい）ということは一ヶ月前に誰か襲わっていたら

「クフフ、アデル。いいかい、昨日ヒソカはアイツに狙われた。一月前は、トリッパーの片割れが狙われたそうだよ。ここはヨークシンの外れさ、4時間もあれば来れる。分かるかい？一月後、アイツは此処に来る。メディアを狙いにだ！」

「アイツが……来る……。」

穴が多いが可能性は十分にあるだろ？。ここまで分かつていれば、戦力を固めやすいし、作戦も立てれる。いつもは不意を突かれていたが今度は分かつている。みんなはヤル気を漲らせてるね。それに

しても、すごいなマキオは電波ツボいことや馬鹿なふりをしているが擬態だつてことが分かる。それでいて全員に信頼されている。あの擬態も彼の処世術の一つなのだろう。しかしポンズの目が血走っている、正直殺気が洩れた瞬間、洩れたかと思った、何がとは言わないが

「さて今後の方針も決まつたことだし、夕食でも食べようか。」

「はい！マキオさん、今日はですね。クモワシのカツ丼とジャポンの味噌汁に漬物、人食いゼンマイのおひたしにポテトサラダですよ。」

「クフフ、スパーの手料理はいつも美味しそうだね。」

「有難う御座います！」

「あつはは！メディアも見習つたらどうだ。」

「五月蠅いよ。フランク、君はアデルを見習いな、口から溢すなよ。」

なんか行き成りすごいアットホームな空気になつた。マキオ、スパー、フランク、メティアの騒がしい組みとボク、マサムネ、アドル、ポンズ静かに食べるグループに自然と分かれた。いい雰囲気だこっちの世界に来てから、初めてかな…久しぶりに前世の故郷を思い出した。それとポテトサラダはマキオの好物だつてさ、羨ましいものだね。

次、戦闘です。さて誰を出そうかな？

side ヒソカ

「はい！みんな、注目ー！」

神が来ると思われる日まで後1日となつた。そんな中、朝食後にまたたりとした空氣を破つてマキオがみんなを呼んだ。なんだんだと集まつたら、見知らぬ人がいた。

「今回、神様暗殺計画に協力してくれる。トリッパーの大原真人君です。みんな仲良くしてね。」

「はい！宜しくお願ひします！」

「転校生かつ！」

「…真人。」

何故か学校っぽい雰囲気になり、スパーが乗っかり、フランクが突っ込んだ。ポンズは真人の名前を呟いた。知り合いだつたのか？その後、普通に馴染んだ真人は、周りからの質問に答え、楽しそうにしていた。彼が協力する理由を聞いたのだがボク以外は協力することになつた。ボクは少し考えようと思う、先に僕達をこんな目に合わせたクソやろうに目に物見せないとね。

夜、夕食が終わり、いよいよ明日だと皆が気合を入れているとき、あいつが来たようだ。あいつの行動が読めていなければ、完全な不意打ち。あいつの行動を読んで、準備をしていても、不意を討たれていた。

「どうやら来るみたいだね。皆寝ている場合じゃないよ。」

マキオが居なければだ。途端に発せられる念、マキオの足元の猫を中心とした円はこのアジトから遠くまで届くようだ。

「アイツの他に8人、正面から5人、裏から3人。よしー・ヒソカとポンズは裏の三人に行くよ！ 他は広場であいつらを叩いて！」

マキオの指示に従つて動く、俺とポンズはマキオの後ろに続いて窓から飛び出してゆく。

瓦礫を避けて進んでいくとマキオから止まるよう指示があった。どうやら、相手も気づいたようだ。見えた！ ベレー帽の男と顔に刺青があり民族衣装を着た男、そして仮面を被った大柄な男だ。

「俺はベレー帽、ポンズは刺青、ヒソカは仮面だ。」

「わかったよ。」

「……。」「クンツ

仮面の男か…強いといいなあ、まず牽制にカードを投げる。サクッと気持ちのいい音がした。

「外れみたいだね、つまらないな。」

バンジー・ガムを着け、凝をした拳で殴る。仮面ごと顔を砕きカエルが潰れたような音がし、男が崩れ落ちる。どうやら死んだようだ。一人の様子を見ると、刺青の男が出した人形を切り捨て、男を貫き、その身体で短刀を拭くポンズとベレー帽の投げたナイフが周りに弾かれ兆弾となつたナイフをいなし、ベレー帽に近づくマキオと距離を取ろうとするも、攻撃を全ていなされ、ボディーにイイのを貰い

ベレー帽が倒れ、男に止めをさすマキオがいた。

ポンズのは明らかに直死の魔眼じやないのか？後で聞かないとね。
マキオ…君は純粹な武術だつたんだね。勝てる気がしないね、でも
興奮してきたよ。フフフ、君たちと戦いたいな。

s.i.d.e メディア

「ビビリやひ来るみたいだね。皆寝ている場合じやないよ。」

「うわわわ、ビビビビビビビビ…ボクだけ戦えないんだけど、
もしかして死んじやう…僕死んじやうの…！」

「おい、メディア。お前は後ろで下がってな。」

「マサムネさん…分かりました！ボクは後ろから応援します。」

「はあ、お前は昔からそうだよな。」

聞こえませんよ、ボクは危険ですから下がつてますから頑張つて
下さい。さて、下がつたは良いけど下手をこいて見つかりたくあり
ませんし、一人で行動して狙われたら田も当たられません。此処は、
一番強いマキオさんのところが正解ですね。多分…そうと決まれば
裏口から出でと、それからマ「こんな所で何をしているのかな？ア
ーハツハハハハ！」ギャーーー、なんでこいつが此処に！

「貴様ら！動くな、こいつがどうなつてもいいのかな？」

「メディア！？」

はい、捕まつてしまつた。メディアです。あつ皆さん、敵（神を

除いた5人）を倒したんですね。スゴイデスネ、ボクが出て行つてから10分くらいですよ？一階のホールが血だらけですね、掃除が大変そうです。マサムネさん、血で濡れた貴方もカッコいいですよ、だからそんなに睨まないで下さい。えーと、今ボクは140センチくらいしかないので、コイツは180センチ位ですかね？嫉ましいです。コイツの顔が見えません、ボクの顔はコイツの胸より下にありますから。

「アーハッハハハハハ！これで終わりだな、残りの三人は強いで！それに私の潜在・顯在オーラは無限大だ！」

「…アイツ、厨二かよ。」

「ふつ！」

「くっくく、止めてくれ。そんなこと言われたら腹がよじれるよ。」

「うわわわ！何このオーラ！ヤバイって何で皆笑つてんの！？誰か速く助けてよ！」

「貴様らあ！何故笑つている！よし死にたいのだな！殺してくれる…」

「ふくく、まあそんなに起こるなよ。神さん。」

「そうだな、短気は損氣だぞ。」

「何故か親近感が湧いたよ。厨二病とかね、もう…限界が…。」

フランクさん！マサムネさんにアデルさんも笑つてないで助けてく「クフフ、教えて上げるよ。それは死亡フラグに入るつて事をね。」ボクの顔に血飛沫がかかつた。ボクの頭の上、神の胸、心臓の部分に先の尖った棒が出ていた。

「うう、力が抜けていく。」

「俺の念獣は武器に成る事が出来てね。君は大きな穴の開いた袋のようオーラが抜けていくだろ？分かるよね、今なら君は神の力を全く行使できることを…ポンズ！」

「うぐぐ、だが此処で貴様を殺してしまえば…」

「ねえ…少しでも…生きたい」「ウギヤア！」「ふふふ…あなたでも…痛いと思うのかしら…？」「や、やめて…じゃあ…その証が欲しいのッ！」「ひぐう…」泣いてつ…？」「げええ」吼えてつ…？」「ぎぎぎ…」呻こいつ…？」「ううあ」叫んでつ…？」「つあ」命乞イラシテニセテツ…！」

マキオさんの御陰で脱出できたと思つたら、ポンズさんがアイツの腕を断ち、足を？ぎ、腹を割き、骨を奪い、腸をぶちまけた。猟奇的なシーン、臓物の不快な臭い、ポンズさんの狂笑、全てが相まって絵画のように見えた。しかし私の意識はここで途切れてしまった。

電波少年の神様暗殺計画 後編（後書き）

能登さん怖いよ能登さん。はい、8話です。というわけであつさ
りと撃破、神様編？終了のお知らせ、ジヨジヨでいうと4部の形兆
みたいなモンです。

格キャラの念能力は次回に、そしてここまで読んで下された方！
ありがとうございます。

閑話休題 メディアの一日コナジト（前書き）

遂にベールを脱いだ転生者たち！はい、9話です。メディアはへたれっ子でファイナルアンサーです。メディアオンラインです。

閑話休題 メディアの1日INシアジト

side メディア

ふああ、ゲジトの上からおはよーいります。ボクの一日はアジトで生活している毎を起こすことから始まります。

「世間あんなもんないでござる。」

卷之二

いい声ですね、声が反響して響いています。調子がいいですね、次は朝ごはんを作っているはずのスーパーさんを手伝いに行きます。スーパーさんは美人で愛嬌が良くて料理も出来る、良妻賢母です。二階にある、ダイニングキッチンに行くとやつぱり、スーパーさんとマキオさんがいました。

「おせよひじやこますー。マキオさん、スーパーさん。」

「おはよう、マテイア」

「やあ、今日も元気だね。耳がキーンとしたよ。」

マキオさんはテーブルで新聞を見ていました。そういえば、ここ
つて新聞って届くのかな?些細な疑問を抱きつつ、朝食の手伝いを
します。手伝っていると皆が集まります。朝の日覚ましあはよ
うじやいまことに文句を言われたり、今日の予定等を話しながらの朝
食が終わったら、お掃除です。このアジトも来たばかりに比べたら
良くなりました。瓦礫だらけ、鱗だらけだつた。廃墟は、「ゴミが無
くなり、フローリングになりました。

掃除が終わる頃には、アジトにはボクとスパーさん、マキオさんくらいしかいません。まあ、偶に誰かいますが、それよりも、実はポンズさんTSしてたらしいです。死んで転生して操られて死んで転生してTSして復讐して、忙しい人ですね。現在はヒソカさんと行動しています。前世との性格の違いに真人さんは、戸惑っていますが私は分からなくも無いです。偶に夜になると、戦いの檄音が聞こえますから中は悪くないと思います。

前回はじめて念能力者の戦いを見たんですが、ポンズさんの暴れっぷりには驚きまして、なんていうか……その……恥ずかしいんですけど……フフ……失禁しちゃいましてね……えつ？そこはお漏らしにした方がイイって……ってマキオさん！地の文を読まないで下さい！……小さく洩れていたと……まつまあ、そうですね。気にしないで今日も張り切って念の修行をしましょつか。

少女修行中

つふう、今日もいい汗かきました。私の修行はマキオさんかスパーさんが見てくれるのですが、助けられて五年、戦う決心を固めて1年半、ついに念を感じて一ヶ月、ようやくようやく発の修行に入ります！といつてもまだまだ完成しませんが、発の参考に皆のを見せてもらいました。

マキオ＆スパー『変形自在の愛獣 メタモルペット』といつて二人で作つたものらしい。

能力は武器形態（槍型、銃型）と獣形態（猫型、大型猫型）に変わってる。槍型は見た目は先の尖つた六角の棒で、細長い杭みたい

に飾り気の無いもの、効果は吸収と放出らしくこの前はオーラが強すぎてすつたそばから放出してたらしいです。銃型は見た目スナイパー・ライフルです。連射と単射で切り替えられて、弾は念弾です。効果は貫通と弾性で、スパーさんは自在に使いこなしていました。猫型は探知系で人をマークングしたり、ソナー・や聴音にサーモグラフィーまで出来るみたいです。大型猫型は大人二人くらいなら余裕で乗れそうです、移動用ですね。いやあ、すごい能力ですね。マキオさんは強化系、スパーさんは操作系で補つて作ってるみたいです。

フランク　『暴君の大騒音　ジャイアンズリサイタル』といって声で攻撃する能力です。某アニメキャラを真似たそうですが、すごい強力です。声にオーラを乗せるんですが、距離・範囲は声が届く所まで、対象は任意で操作可で効果が三半規管にダメージを与える。戦闘補助としてはかなりチート染みてます。弱点はオーラの消費が大きいことと声を出せなくなつたら使えないことです。放出系つて戦いでかなり強いですよね。

マサムネ　『孤軍奮闘　ステゴロタイマン』といって一対一用の能力です。100m四方の空間で罠が設置してある部屋で戦うらしいです。部屋の中ではどちらも絶状態になります。もちろんマサムネさんは罠の位置を知っています。これを破つたのはマキオさんだけらしいです。マサムネさんは前世からすごい強い不良だったんですけど、マキオさんは化け物ですね。

アデル　『極悪制圧軍隊　バットカンパニー』といつてとあるスタンドのまんます。でも規模は此方の方が大きいと思います。G・Eジョー人形みたいなのが大隊を組んでいます。歩兵、軍用車、戦車、戦闘機、戦闘ヘリ、空母まで出せます。一つ一つはそんなに強くは無いんですが、集団で来るので恐ろしいです。アデルさんは離れたところで使うそのので使つてている間は動けないという制約は

あまり効果ないですね。

真人は一方通行の能力で反射です。ベクトル操作です。何故短い
かというと説明されても良く分かりませんでした。ヒソカさん、ポンズさんは割愛しますね。こうしてみると皆さんチートですよね、
羨ましいです。幸い転生者は総じて潜在オーラが多いので強くは成
れることのこと、死んだらやなんでゆっくり起こしたのがこの結果で
す。

「メディアちゃん、そろそろ夕飯作るから手伝ってね。」

「はい、分かりました！スパーさん。」

それにしても、マキオさんの技 消力シャオリでしたつけ前世の時からも
どきが出来たとかやつぱりあの人アノヒトが一番チートですね。

闇話休題 メディアの一日ハナゾブ（後書き）

マキオは念獸をもう使いません、スパー用です。そろそろ、うわわをあわわに換えてもわかりませんよね？前書き、あとがきはスル一ですよ、普通は。

嵐の先触れ（前書き）

Q そんな話で大丈夫か？ A 大丈夫だ問題ない。はい10話です。
今回はV.S旅団編の予告です。

嵐の先触れ

Side ポンズ

部屋が静まり返っている。新たな問題が発生していたのだ。転生者のことが、幻影旅団にばれてしまった。トリッパーの片方が神に襲撃された時、紛っていたのだクロロが…このことに気づいたのは捕まつてしまつた、トリッパー三浦俊祐みうらしゅんすけが入院し、目覚めた時、念と記憶が無くなっていた。自分が誰か判らなくなつた俊祐は今恐慌状態にある。

「神よりも危険な状態だね。あつちは少々頭が逝かれていたから読みやすかつたんだけど。」

「マキオ、そんなに危険なのか？確かに念と記憶は強力だがよ、こつちには更にチート臭い能力だぞ。負けはしないんじゃねえのか？」

「分かつてないな、フランク。俊祐の念能力は『朱の王・キングクリムゾン』には時間を消し去るし、未来を予知できる『墓標・エピタフ』がついているんだ。それにクロロの能力は『盗賊の極意スキルハンター』で念能力を奪える。記憶を奪つた能力も不明だ、大体俊祐は強い！」

「真人の言うとおりだよ。記憶というのは人の持つ情報の中でも未知の物だ、どこに在るのかも分からぬ。それを奪えるというの是非常に危険な能力だ。自分が何をされたのか、何者なのか分からなくなる。クロロにとつて最高の組合せ、俺たちにとつては最悪だね。アフターケアもバツチリさ。」「マキオさん、僕達はクロロの正体を知っています。でもポンズさんの能力なら殺せると思うんですけど。」

「メディアは空の境界を読んだことあるかい？そのヒロインがポンズと同じ能力なんだけど、未来予知の能力者と戦うんだけど、そいつは予知した未来にどうやつたら辿り着くか解る能力でそうなるよう積み重ねるんだ行動をね。でもエピタフは違う確定した未来を観るんだ、逆らうように動いてもその未来道理に動く、殺しても確定してるんだよ。」

「つまり？」

「無敵。でも原作では敗れた。勝利する筈だつた未来に辿り着けなかつたから。」

そう原作ではディアボロのスタンド・キングクリムゾンは負けた。彼は永遠に未来に辿り付けなくなつたから、でも此処にはゴールド・エクスペリエンス・レクイエムは無い。念能力には限界がある、あの能力は人には再現できない出来るとすれば、キングクリムゾンをくれた神だけだ。それをクロロは知つてゐるだから危険なのだ。彼はディアボロが求めた無敵を再現できる。勝てる可能性があるのは、私の直死か真人の一方通行。

side クロロ

俺を悲しみと歡喜が包んでいる。この前偶然見つけた念能力者から能力を盗んだとき、パクノダとイーノックが死んだ。パクはいつも俺を心配してくれていたし、イーノックは俺の無茶振りに大丈夫だ問題ないと應えてくれた。三番と四番の欠員、殺したのは俊祐という念能力者。でも殺さない、能力が消えてしまうから。憎しみで動いたりはしない、二人は俺の中で生きているのだから。俺の新しい能力『旅の栄 - ブックマーク』が有るから、旅団メンバーの二人の力は俺が受け継いでいる。

仲間の死と俊祐の能力と記憶は俺を成長させた。俺は負けない誰にも、俺は逃げない一人が見ているのだから。クラピカは逃がさず殺す、クルタ族は残らず狩る。十老頭も始末する今はあいつらに使われているがこの手で殺す。グリードアイランドで念能力者を狩る、そして能力を奪う。皆はきっとついていくだろう、俺たちは止まらない。キメラアントの王も俺たちを止められはしない。

side end

「クロロが壊れてぶつぶつ言つてる…。」

「きっとパクのことがきてるね。ほっとしておくれ。」

「団長は纖細だから。」

「きっと部屋にいつたら泣くと思つぜ。」

「賭ける力?」

「お前らは不謹慎だな。」

「あの三人相手に一人もぶつ殺すのか、俺がやりたかつたぜ。」

「お前は突っ込んでいつて返り討ちだな。」

「あんだとおー！」

「二人とも外でやつてよ。埃が舞うだろ。」

「……。」

旅団での一幕、確実に変わった物語。頭は暴走し、手足は混乱する。それ違う両者、悲しみを暮れる頭、死を慎む手足。潜在的に敵対する旅団、危険視する転生者組み。未来を紡ぐのはどちらか、静かに生き時を楽しむ方が、未来を知り力を得て奪い続けることを選ぶ方か。嵐の前の静けさ、戦いは近い。

嵐の先触れ（後書き）

転生組みの会議、ポンズ視点です。他にも詰め込もうかな?とか思いましたがやめました。旅団では温度差が酷いです。クロロは当事者なので冷静じゃありませんが、メンバーは団長が気にしそぎているので逆に気を使っています。ジョジョ好きには申し訳ないんですけど、自分なりの考え方でスタンダードを使いますので、原作より鬼畜または弱体化しているとおもいます。最後に、サーレーはもっと強いはず!

side クラピカ

今、村にはマキオさんたちが来ています。彼らは村の民芸品と交換で生活趣向品と変えてくれる。クルタ族が作っているネフト織物はそれなりの価値を持つようで、此方に有利なように交換してくれるから僕が作ったのでも交換してくれる。どうやら村の外の人は目が赤くならないみたい、僕達は興奮したり、集中している時は赤くなります。僕達の作るネフト織りは不思議な力が宿っていて、色々と便利だそうです。

「マキオさん！今日はどんな漫画を持ってきたんですか？」

「ああ、クラピカか。今日はね、剣風伝奇狂戦士に最初の一歩を持つてきたよ。」

「剣風伝奇狂戦士ですか？」

「お勧めだよ、でもクラピカにはまだ早いかな？」

「もうボクは13歳だからいいんです！」

まったくマキオさんはすぐ子ども扱いする。それにしても今回は人が多いです。いつもはマキオさん、スパーさん、フランクさん、マサムネさんくらいで、アデルさんやメディアさん、ポンズさん、ヒソカさん、真人さんは初めてですね。マキオさんとスパーさんは、村の人や子供とよく話していて、みんなと馴染んでいます。フランクさんは女性をナンパしてます。マサムネさんは道場でクルタ族に伝わる二刀流を習う傍ら、ジャポンの剣術を指南してくれます。

クルタ族の村か、ここにも転生者がいるとはねえ。トエトだけ？まあ、小心者で戦いとは無縁で全く興味が湧かないね、でもマキオは知っていたか。近くの街でコンピューターでマキオが開設したサイトに助けを求められて、マキオは助けることにした。それってもともと旅団とやり合つつもりだつたのかな？

「ねえ、ヒソカ。」

「なんだい、ポンズ。」

「ヒソカは戦うの？」

「勿論さ、戦いたかつたし、それにこのメンバーなら死ぬ危険が低いから。でもクロロがキングクリムゾンを持つてゐるなら、他のメンバーーかな。」

「結局、クロロは真人が担当するもんね。」

ホント残念だよ。彼が泣き叫んで命乞いをする姿が見たかったんだけど…想像がつかないな。本当に残念だよ、真人のベクトルを作する能力で勝てるかな。そこが問題だけど、気になら負けだね。僕はまだポンズどころか、マキオにも勝てないからね。……あれ？ どつちが強いのかな。

「ポンズ、一つ聞いていいかい。」

「何？」

「君とマキオはどつちが強いのかな？」

「マキオよ、どこを切ろうとしても見切られるし、切つたと思つたら流されるから。ありえないわよねえ、魔眼使つてゐるのに避けられるとかねえ？」

マキオはそんなに強かつたのかい？ どうやら彼には何か秘密があ

るみたいだね。

side change シャルナーク

団長が前と違う、パクノダ達が死んでから変わってしまった。団長にかぎって仲間が死んだからって自暴自棄になる筈がない。死にたいがために進むのではなく、もっとこう危険な感じだ。そう、油断だ！己が圧倒的優位に立っているという慢心！しかしあの団長がそこまで自信を持っているとは凄い能力を得たのだろうか？いついたいなんだろうか？今までだつて団長は強かつた。浮き足立つてしまうほどの能力…………わからない。

「シャル、どうかした？」

「マチか、なんでもないよ。考え方をしていただけさ。」

「そう……シャル、あなたは今回の緋の目狩りどう御づく？」

「ん~そうだね、団長の好奇心をくすぐったんじゃないかな。」

「私は嫌な予感がするよ。」

マチの感が危険を感じている？マチの感はよく当たる、何度も危機を救ってくれた感だ。クルタ族にはなにがあるのか？実際に仕事に入る前から命の危機を感じているのか。団長の油断、マチの感……どうも今回は旗色が悪いね。パスするか。

「マチ、俺は今回は抜けさせてもうつよ。調べたいことがあるからね。」

「調べたいこと？」

「そッ調べたいことがね。」

パク達がどうやってやられたのか、誰にやられたのか、団長がなんの能力を得たのか知りたいしね。え~と、まずは最近の事件を探して、ハンターサイトかな?彼に連絡をとつてもいいな。よしそうしよう!番号は……あつたこれだ!

『はい俺です。』

「あつ、オレオレ! シャルナークだよ。」

『シャルナーク? ……ああ! ハンター試験の、どうしたんだい急に連絡してきて。』

「うん、相談したいことがあってね。今どこにいるの?」

『今ね、ネフト村で狩りの準備してる。でも明日パークシンで仕事があるから会えるよ。』

「狩り? 何を狩るんだい?」

『幻影旅団っていう奴。』

「へ、へーそーなのかー。明日、うん明日会おうか。」

『わかった、じゃあ何かあれば連絡してくれ。』

ななんばれてんの! 館か、館なのか! お落ち着け、クールになれ、KOOIになれって駄目だ! 考えが纏まらない。彼は俺が旅団員だつて知らない筈だ。これは逆にチャンスなのか? いや、よく考えろ! 団長は油断しているんだぞ! このまま行つたら彼に喰われるか? しかし团長がこれを知つた上での態度なら……いや危ない橋は渡れない。今にも壊れそうな橋を渡る奴はそうそういう、渡のは相当な馬鹿かイカレテル奴だけだ。メンバーに話すのは危険だ。団長が何を考えてるのかさっぱりだし、裏切り者にされるかも知れない、皆が生きて帰つてきたら接触しよう。

「シャル、どうしたの?」

「いや、明日はヨークシンについて友人に会おうかと思つてね。」

「それって前に言つていた面白い奴のこと?」

「 そ う だ け ど ？
「 シ ャ ル 、 私 も 付 い て 行 く わ 。
「 え つ ！
」

side マチ

パク達が死んで、団長は変わってしまった。クロロ、貴方は気づいている?クロロが嫌っていた、故郷の老人達と同じ顔をしていることに。老害と蔑んでいた、人たちと同じ顔だ。自己保身に余念がないで、保守的で古い考え方、力に溺れた人たちって言っていた。ねえ、クロロその自信はどうから出てくるの?

ヨークシン、マキオたちのアジト

シャルナークが拳銃不審で気になつてついてきたら。捕まつてしまつた、これは何の冗談なのだろうか?友人同士のじやれ合い?

「悪いね、シャル。すまないが此処で君らはリタイヤだ。」

「マキオ、これは一体何なんだ!?」

「君なら俺に連絡すると思っていたよ。しかしあ嬢さんまで連れてくれるとは予想外だつたけどね。」

「それじゃ、昨日わざわざ情報を流したのは俺を誘導するためなのか?」

「まあまあ、そんなに落ち込まないで15歳でそこまで考えるのはそうはないから。」

「…誘導しやすかつた?」

「凄く!」

なぜか、漫才が始まっているがどうしたらいいのだろうか?もう嫌だ!クロロは人の話を聞かないで話を進めるし、ウヴォとかフ

インクスとかフェイタンとかは戦いたいだけだし、ノブナガやフランクリンだつてあつちよりだし、押さえ役のパク達は死んだし、最近入ってきた、ボノレノフって奴は不気味だし、ああ駄目だ。寝よう、寝たら全て終わってるかな？

人それを現実逃避という

side change アデル

夕飯時、ヨークシンで用事があつたに呼ばれ、私はアジトに行くと旅団メンバーで現在敵である筈のシャルナークとマチがいた。目を白黒させていると奥からマキオが出てきた。

「マキオ君、これは一体何が？」

「アデルか、なに簡単なことだ。一人捕まえたから、見張つてて貰おうと思つてな。」

「どうも、シャルナークです。シャルつて呼んでもいいよ。」

「マチ…。」

「こちらこそ…マキオ君なんでこっちの子は体育座りで壁をしているのかな。」

「俺が説明するよ。マチはパクが死んでから旅団のために骨を折つていたんだけど、今回マキオに捕まつて今まで張り詰めていたのが無くなつて、今の旅団について考え始めたらこうなつた。詰まり現実から目を背けているので、そつとして置いて下さい。マチは頑張つたんです。あの濃いメンバーを一人でまとめてたんですよ。」

シャル君はなにか力説してるけど、後ろの方が気になりますよ。マチちゃんが壁の方で何かを呴いて殴り始めたけどいいのかな。私がこの子たちの監視に選ばれたのは能力の相性からでしょう。とい

「う」とは私はネフト村で戦わなくていいのですか。楽ですね。

「ブツブツ……大体クロロもクロロよ……皆をほつといて何処か行くし……帰つたらやれ仕事だつて……ブツブツ……」

とりあえず、マチちゃんを落ち着かせてからですか。

side change マサムネ

夜になつてから、マキオが帰つてきた。どうやら何かしてきたようだ、妙に機嫌がいい誰かをからかつてきたのだろう。部屋に入ってきた時の全くブレのない歩法、一部の隙のない佇まい、やはり凄いなマキオは此方にきてから武術を学んでから気づいた。どうやらマキオは決戦時の担当を決めるようだ。

「じゃあこれから誰が誰を担当するか決めるけど意見や要望はある?」

「マキオ、俺はノブナガと戦いたいぞ。」

「じゃ、ノブナガはマサムネね。他には?」

「俺に敵を、クロロをやらせてくれ!」

「真人はクロロと他はないみたいだね。ヒソカとポンズはフェイタン、フィンクスをお願い。スパーはフランクリン、フランクはボノレノフ、ウヴォーは俺でメティアは村の人の避難を手伝いつつ皆の支援をお願いするよ。」

皆はまだ話し合っているが俺はノブナガと戦えることを楽しみにしている。別に人を殺すのが楽しいわけじゃなく純粹に戦いが好きなんだ、バトルジャンキーっていうのか、今の目標はマキオだな。いくら念能力者には相性があるといつても実力差は大きい。いつか

マキオを越える武人に成つてみせる。

side change ヒソカ

フェイタンとフィンクスか、楽しめそうだね。ポンズとなら心強
い、気をつけるべきは廻天リップー・サイクロトロンと許されざる者ペインパッカーか、フェイタンはポンズ
が仕留めればいいし、フィンクスは攻撃させなければいいから楽か
な？能力が分かつてているつてのは大きなアドバンテージ、フフフ樂
しみだよ。

「ヒソカ、氣味が悪いよ。喜んでるのは分かるけどね、でもその顔はやめてね。」

「すまないね、ポンズ。でもこの顔は生まれつきなんだよ。フフ

「はあ。」

フフフ、溜め息なんてついちゃって、もう諦めたほうがいいよ。だんだんヒソカつぽくなつてきてるからね。ところで他の人は大丈夫なのかな？真人とかクロロに殺されちやうんじやないかな、ならばくらがやつても良いんだよね。楽しみだよ、本当にネ。

side change フランク

ちくしょーーーー！またナンパ失敗だ！クソ、周りはリア充ばつかでずるいぜ。俺なんか、俺なんか、おホモダチにしか好かれないわ！マキオは元からだし、マサムネも道場の姉ちゃんといい感じだしよ。アテルはモテモテで、ヒソカの野郎はポンズちゃんと宣しくやつてるし、チクショウこの恨みボノレノフで晴らすべし…。

「フランクー、ちょっと頼みたいことがあるんだけど。」

「マキオか、なんかあつたのか？」

「ああ、それでな……。」

「ふー、しようがないな。無い方がいいが何事も万が一があるからな。古参の俺がやるのが最善か？それよりもだ！大事なことがあったんだ。」

「マキオ、大変なことがわかつたぞ。」

「なんだ？」

「誰もナンパに付き合つてくれない。」

「そりや、此処は田舎だから、ホイホイ付いていくのがおかしいだろ。」

「後、クラピカは男だった。」

「まだ言つてたのか、フランクが好かれるのは男だけという悲しいジンクスがあるだろうに。残念だつたな懐かれてたのに……。」

「チクショウ、俺も巨乳の姉ちゃんとイチャイチャしたいぜ。」

クソー、マキオめ。ナイスおっぱいをスパーといい仲だから余裕ぶりやがつて羨ましい！あー何処かに落ちてないかな、おっぱい。この際、チッパイでもかまわん！一向にかまわん！顔は悪くない筈なんだけどなあ。あつ！あんなところでメディアが修行してる、これは奴でストレス解消するしかない！ふふ、民家の裏でこいつ修行とはな。

「あつ！フランクだ。ナンパは失敗？」

「ええい、こんちきしょーーーう！！ワシが、ワシがー！フランクじやあーい！！」

「おお、懐かしいですね。音速ですか、ほんーーーうーー音速

「おつぱいは一日三回までよ……」

「チキシヨー……おつぱいにありつけない俺にそんなこと言つ
なんて！最終形態に、最終形態になりさえすれば……。」

「なに？ってそれ、セルですよ！」

おつと、いけねえネタに走りそうになってしまった。昔からコイ
ツと話すとネタにしかならないからな。

「それより、メディア、発は完成したのか？」

「フフフ、遂に完成しましたよ。マキオさんのスバルタに耐えた
あの時間が報われる時がつ！」

「ところで聞きたいことがあるんだが。」

「最後まで聞いてくださいよ。聞きたいことって何ですか。」

「ポンズつて隠れ巨乳という噂があるのだがホントなのか？」

むつ、メディアの奴が呆れた顔をしやがった。やれやれこの人は
みたいな、私は分かつてますよという顔がムカつくな。

「測つたわけじゃないんですが、確実にこはありますよ。もしか

したらD有るかも……。」

「なにい！ホントか！夢が広がりんぐだな！ナイスだ、メディア。

」

「もうと褒めて下さい。」

「調子に乗るな、このチッパイがつ！」

「うひ、言つてはならないことを。おつぱいではなく、チッパイ
に成つてしまつとはメディア一生の不覚です。」

ははは、足搔け苦しみ絶望しろ。前世の頃からオツ・パイ星人だつ
た。貴様にはかなりの苦痛だろ？に。俺を馬鹿にした、報いだ！
なぜだ、なぜ奴はにやけている。

「どうしたメディア、気持ち悪いぞ。」

「ふへへ、ちょっとおっぱいを思い出しましてね。ええ、そういうですよ。女性ですから、女湯ですよ。当然じゅありませんか。」

「ナン……だと……。（ば、馬鹿な女湯だと我らがおっぱいの聖地に）

「コイツは入れるところのか……）

「それでは、一通り絶望したら、帰ってきてくださいね。」

「チクショー……！」

その後のこと記憶が無い、きっと一つものようにおっぱいについて、考えを巡らせているはずだ。断じて悔しきで、枕を濡らしてはいない、断じてだ。

決戦前日（後書き）

我々はおっぱいだ！はい12話です。メディアとフランクはオッパイ星人。ポンズは隠れ巨乳、異論は認めない。受験で忙しかった、その反動でこうなったせいなのは確定的に明らか。しかし、フランクは打ちやすかつた。

決戦 フェイタン

Side フェイタン

団長から仕事が入ったネ、クルタ族の田・緋の田の蒐集、つまり殺して奪えばいいネ。団長の話は長くて、遠まわしに言うから少し退屈、退屈な話より、気になるのはマチとシャルのことネ。あの二人がやられるとは思わないけど、用心に越したことは無いネ。例えば、この仕事は待ち伏せされてたりとか力。

「フィンクス、どう思う力。」

「十中八九、罠だろ?」、クロロの奴何考えてんのか。」

フィンクスも怪しく思つてゐみたい力。団長はおかしくなつたヨ、周りが見えていない以前なら、もっと面白おかしく厭らしいまでのことをするのに、でも今回の虐殺は楽しみヨ。

「なあ、団長クルタ族つてのは強いのか?」

「なかなかやるらしい、切れると目が赤くなつて強さが倍増するらしい。」

ウヴォーもヤル気が漲つてるネ。生半可な奴らじや止められない、誰が相手だろうがヤツテヤルネ。

朝、クルタ族の村。閑静な森の中、待ち伏せにいち早く氣づいたのは、野生的感を持ち、常に戦いを欲していたウヴォー

であった。僅かに感ずける臭い、微かな空氣の揺れ、そして狩るもの動きの音にウヴォーは気づいた。ウヴォーが気づいた時、男はいた。絶状態の男はとっさに凝でガードしたウヴォーを弾き飛ばした。

「タフだな、お前は。」

「貴様は何者ネ！」

男に気が向いた刹那、悪寒がした。ハツキリとした死の気配、その予感にしたがつて身を投げるとさっきまで自分がいたところに女が立っていた。

「あなたがフェイタンね。」

「私の相手は貴様力！」

傘を広げ、女の後ろへ高速で移動し、切りかかる。

しかしその不意打ちともいえる攻撃は易々と避けられる。

女の反撃の袈裟切りを横つ飛びで避ける。あの攻撃を受けてはいけないと本能が囁いている。女の青い目がフェイタンを射抜いている。

「（スピードは此方が上、でもあっちの方が動きが洗練されていて厄介ネ。）

「そつちを見ていっていいの？」

「つ！」

上から枝が落ちてきた、どうやつたのか分からなかつた。後ろに飛んだ瞬間、また悪寒がした。腕にナイフが刺さっていた。

「あら、また外しちゃった。」

「くつー（投げナイフ）」

「でも、いれはビーフ？」

今度は3本投げてきた。右に避けると2本が空中でぶつかり左右に弾かれた。

「（不味いネー！）」

なんとか、剣で弾くと後ろで金属音がした。

「ナイフは3本よ。」

「（兆弾ー！）」

身をギリギリでよじる、ナイフは肩を切り裂いていった。ナイフは避けられた。しかし女の狙い通りだった。ナイフに注意を向かわせることが、これが狙いだった。

「その腕、貰うわね。」

女のナイフはまるで豆腐を切るように淀みなく切り裂いていった。フェイタンの左手を奪つていった。

「うぐあああー！」

「まだ、終わらないわよ。」

力の限り、悪寒から避け続ける。フェイタンは逃げの体勢をとつていた。

「また外れか。」

フェイタンに肉薄しては、その手にもつナイフで切りつけていく女。

「（死にたくないネ！）」「

紙一重でかわしていくフェイタン、しかし冷静さを失ったフェイタンは女のフェイントにかかり傷を増やしていく。

「これで終わりよ。」

フェイタンの痛みが臨界点を超えた。瞬時に変わる服装、せつきとはまるで違う威圧感。

「腐的女？？乘情形？？？疼痛？（クソ女が、調子に乗るな。殺してやるよ、痛みを返すぜ）」

灼熱に換えて！！！『許されざる者・ペインハッカー』

『太陽に灼かれて・ライジングサン』

「要是？个是不是做了？（これならやつたか？）」

いまでこの能力を使ってやれなかつたことはない、しかしフェイタンの胸のうちにはざわめく様な予感があつた。死の予感、あの女が現れてから一度も薄れたことのない、思わず逃げてしまいたくなる。気配がまだ残っていたからだ。

「ぱいぱい、お仲間も同じ所に送つてあげるから。」

胸の中心からやや左にズレタ場所を刺されて、体から何かが無くなつていくような感覚と共にフェイタンの肉体は崩れていった。

「私はポンズ、この名前を抱きながらゆっくり死んでいいでね。」

ポンズのまるで何も感じていない、そんなふうな顔を睨みながら最後に言えたのは。

「能死、糞的女人。（死ね、くそ女）」

一言だけであった。

side end フェイタン

決戦 フェイタン（後書き）

フェイタンの話し方が分からぬ。はい13話です。連投です。サーセンwwwあつさりとした戦闘、フェイタン退場のお知らせ、フェイタンの念が描写無しのはしようです。直死の魔眼マジチートです。最後にふえたんは女のこの方がよかつたネ。

決戦 メディア ポノレノフ（前書き）

そーぞくせバトルタイムですよ。

決戦 メディア ボノレノフ

Side メディア

「今日、夜が明ける前にこの村に旅団が来る。」

「その話はどこで聞いたんだい？」

「昨日、シャルナークとマチを捕獲した。一人の監視はアデルがついている。」

はあー、マキオさんは凄いですね。此処まで、あっさりと進んでいくといつそ清清しいまでの怪しさですね。何者なんでしょうか？強くて賢くて…容姿も良いし、でも主人公つてより最後の最後で裏切るラスボスって雰囲気なんですよね。皆が誰を担当するか、話し合ってますけど、私は戦闘要員じゃないんで気にしなくてもいいですから、気が楽です。

「メディアは村の人の避難を手伝いつつ皆の支援をお願いするよ。」

「はい！分かつてます。誰かが重傷又はフェイタンが発を使用したときで良いんですね。」

「うん、そうだよ。メディアは今回の作戦の重要な鍵だからね。ただし、重傷者は僕以外が負った場合だからね。いいかい？」

「はあ、分かりました。」

マキオさん以外ですか。つまりマキオさんは傷を負つても治せることですか？マキオさんですからできそうですね。そんなことより僕の発を本邦初公開ですよ！

『緊急病棟24時・ハイパー・メディアクリニック』複数名の傷を再生することができる。再生途中は完全無敵で当たり判定が無い。制約内容、患者は名簿に名前を書かないといけない。名簿は患者が書かないといけない。患者を同時に治することは出来るが、個別で分けることはできず、まとめて治療される。デメリット、名簿に書かれた時の状態に再生されるため、怪我をしてから書いてもその状態が記載される。メリット、複数人を治せる。擬似的な不老不死を再現できる。

露骨な文字稼ぎ？いいえ、親切心です。

—

「皆さん！避難して下せー！」

現場のメディアです。現在午前4時、村の南西部にて旅団の接近が確認され、マキオさんがたが迅速に処理に向かつた模様です。現場からは以上です。

ふう、ボクです。いつかいアナウンサーをしてみたかっただよ。さてと、ボクはやぐらの上で戦況を確認ですね。

おお、皆見事にバラけてますね。ポンズさんが中心らへんで戦つてて、周りを囲むようになります。クロロは…かなり遠くでよく見えないです。真人さんは大丈夫でしょうか？

…速わざり！ポンズさんってあんなに動くの速かつたんですね。
どんじん離れてこります。ああ、もうビリーハ行つたやう分からな
いです。

村から一番近いところまで戦つている。マキオさんとウブォーギン
は凄い殴り合にしてます。リアルグラップラーバキですね。手に汗
握る戦いです。ウカオーギンの体がつーあつあつ！すーご…肉体で
す…。

ヒューチー！念の量です。もしかしてフロイタンが発をしたんで
しゃつか？おつと並ぶとヒューチーでした。『ハイパー・メディアクリニ
ック』…

あれ？おかしいな十秒くらいこま掛かるんだけど、直ぐに終わっち
やつた。どうこりひとでしゃつか？

side chance ボノレノフ

「あ～あ、女の子とやつたかったな。でも女性に手を上げるもの
なんだから別によかったのか？でも相手が気持ち悪いおつさんなら
ぼこぼこにして気になんかしないな。あなたの名前はなんていうん
だ？」

「ボノレノフだ、ギュドンドンド族の舞闘士としてお前に一曲く
れてやるわ。」

「固こやつだね。俺はフランクだ。わあ、始めよ！」

最初に見たときは、ただの馬鹿だと思ったが一つ一つの会話の中

でも隙はない。どうやらなかなかの使い手らしい。

「ああ、今こそ…ギュドンンド族の死の舞踏をみせてやるとしよう。『戦闘演武曲（バト＝レ・カンター＝ビレ）』ボノレノフは体中に包帯を巻いており、包帯の下の体には多数の穴が空いており、ギュドンンド族の舞闘士はその穴を使って音を奏でることができる。ボノレノフはその音で攻撃を相手に見舞う。」

「コイツはすぐえや。」

フランクの攻撃は届かない、ギュドンンド族の動きは狩りの技、古い戦いの歴史、深い森の奥地で猛獣を狩るために培われたものだ。つまり、フランクの喧嘩殺法は触れることも敵わなかつた。

「どうした？まだプロローグだぞ、是非ともエピローグまで聞いて欲しい物だが。」

蛮族の格好をしたボノレノフがフランクの肌を切り裂く！

「段々威力と速さが上がっているな。こりや厳しいな。」

フランクの蹴りや打撃は空回りを起こすことしか出来ない。そしてフランクは逃げることを選んだようだ

「逃がすか！これで終わりだ！『戦闘演武曲（バト＝レ・カンタービレ）木星・ジュピター』」

ボノレノフが猛追する。やがて追いつき、フランクの後ろまで来た。

「ああ、これで終わりだよ。『暴君の大騒音 ジャイアンズリサイタル』！」

フランクの発した大音量の声がボノレノフの音樂を妨害し、ボノレノフの三半規管等の重大な故障を引きえた。

「悪いなおつさん、俺とあんたの相性は最悪だつたんだぜ？あんたの念は体から出す音を媒介に使う、確かに強力だがタイムラグがあるのはいただけねえな。…もう何も聞こえねえか。」

ボノレノフの意識はフランクが声を発した時に閉ざされていた。音というのは振動であり、振動が強くなると衝撃になる。フランクの能力は距離が離れていると三半規管が揺れ、気分が悪くなるくらいだが、至近距離で喰らってしまうと頭の中に直接ダメージを負ってしまい戦闘不能になってしまつ。余談だがフランクは130デシベルという脅威の声量を持ち、これは飛行機のエンジン音を百メートル以内で聞いているのと同等である。

side end ボノレノフ

決戦 メディア ボノレノフ（後書き）

はい、14話です。戦闘描写が糞杉ですね。チツ反省してマース
昨日友達が私の漫画に「コーラをぶちまけやがった時の私の罵声に対
する返しです。思わず呆気を取られて許してしまいました。まあ、
別に重版だからいいんですけどね。

決戦 フィンクス ノブナガ（前書き）

ビックバンインパクト！小型ミサイルと同じ威力
サイクロトロン！地球が割れる

ウヴォー涙目！しかし、私はそんなウヴォーが好きなんだぜ。好きなキャラは活躍する。つまりノブナガが強いはずです。よってノブナガ trueです。フィンクスファンには涙を飲んでもらいます。原作四年前だから弱くてもしようがないよね！

決戦 フィンクス ノブナガ

Side フィンクス

俺の目の前には、歪んだ笑みを顔に貼り付けた男がいる。その男は最初にこういった。

「君がフィンクスだね。せいぜい楽しめてもらおうか。」

と、俺は激情に身を任せ暴力に訴えた。俺の名前を相手が知っているということをよく考えもせぬ。違和感を感情で振り払った。いつもより体が流れることを気にもせず。

「（クソ！何であたらねえ！）てめえ！何モンだ！」
「くすくす、応えたら何かこの状況が変わるのかな？」

俺の『リッパー・サイクロトロン廻天』は腕を回せばまわすほど殴った時の威力が跳ね上がる物だ。殴った時に威力が大きくなるつてことは攻撃を空回りさせられたら、無用の長物になるつてことだ。つまり、当たらなくちゃ意味が無い。

砂を巻き上げて蹴り込んでアイツにはあたらねえ。

「どうしたの？息が上がってるよ。
「黙れゴラア！」

木をぶん殴って、アイツに向かつてぶつ飛ばしても軽く避けられ

る。

「今何かした?」

「……ハアハア。」

手当たり次第、アイツにぶつ飛ばし、その合間を縫つて近づいて殴りにいつても掠りもしない。

「すごいね、あつといつ間に広場になっちゃったよ。」

「ハアハア、今すぐ口も利けないようにしてやるよ。」

幾分か冷静になった俺は、明確な意図を持つて追撃を行つ。

「鬼さん此方!なんてね。」

「はあはあ(あと少しだ。)」

「どうしたの?もう疲れちゃったのかな?」

此方の攻撃は一切当たらない、空を切るばかり。アイツは円を描くように攻撃を捌きながら避け続ける。

「アハハハハ、必死な顔をしているね。どうしてあつ!」

「(来た!これをまつていた。)死ねやゴラア!」

俺が砂埃で起こした位置、そこに深く穴が開いていて、穴の上には木の枝が被さり、パツと見ても分からなくなつていて。あいつはそこに足を取られ、決定的な隙つくつた。俺は確信していた。当たらなければ、当たるようすればいいと、チャンスは来た。

「なんてね、残念でした。」

「ぐええ、あなんでえあたらねえ。」

「何でだろうね、君が知ることは無いけどね。」

しかし、俺の攻撃は奇妙なほど、今までに比べて、異様なまでに体が流れてしまった。まるで俺の体がアイツの隣の木に引っ張られるように流れてしまった。折れた木の枝が首に刺さるその瞬間、時間が止まってしまったかと思うほどゆっくりと流れていった。俺はそんな時間の中、あの時、よく考えていたら。アイツが俺のこと知っていたこと、体が妙に流れるのを気にしていたら、もしかしたら結果は変わっていたかもしれないと考えていた。

でもそんな可能性は自らの手で摘み取ってしまった。この男に勝つことはない、首から流れる血が教えてくれる。俺はもう死んでしまった感じている。

アイツは俺を見下していた。路傍の石を見るような詰まらない物を見るそんな目だった。

side change ノブナガ

俺はノブナガ、ノブナガ＝ハザマっていうんだが、まあなんだ今はクロロが頭の幻影旅団つてのに入ってる。おれ自身にはこれといって目的は無いんだが、同郷のよしみで周りに流される形で入ったわけだ。よくつるんでたウヴォーやシャル、フランクリンがかなり

乗り気だったのが大きな理由だ。脳味噌筋肉のウヴァーと性悪のシヤルは、流星街の外の世界にすぐ興味津々で、フランクリンでさえクロロの話を聞いてからソワソワしてやがった。

俺の家はよ、ジャポンの出でよ。俺の曾爺さんが何処かのお嬢さんと駆け落ちして海を渡つたらしくて流れ流れてこんな所まで移り住んできただとさ。そんなことは知つたこっちゃねえし、爺の惚氣というか自慢話を聞いてもフーンで済ませるが、曾爺さんも爺さんも親父も剣を捨てなかつた。だから俺も剣を使う、日本刀っていうらしくて、切れ味は随一よ、親父や爺さんなら鉄塊でも細切れに出来るつてんだ。恐ろしいもんだね。

俺が習つた、剣は氣つていうものがあるんだが、こっちでは念といつてすげー色々出来る見てーだ。俺は強化系だから面白いのはできなかつた。タイマンだったら負けねえぜ?だからよ。

「俺はノブナガ=ハザマだ、お前の名前はなんだ?」

「マサムネ、マサムネ=アゲハラだ。宝蔵院流槍術の使い手として、波佐間の剣と立ち合わせてもらおづ。」

「宝蔵院流槍術：既に失伝してたと聞いてたんだが。」

「…口伝で身内にのみ伝わってきた。しかし脈々とその業を受け継いできた。我が十字槍、受けてみよ…」

「やれやれ、ヤル気びんびんだ。…波佐間信長押して参る…!」

一瞬のにらみ合いの後、ノブナガが出る。

「つしい！」

鞘から刀身をスラリと出した、ノブナガは上段に構え、真上から振り下ろす、一の太刀。十字槍を持ち、斜に構えたマサムネは静かに左前方へ歩を進め、僅か数センチのところで刀を避ける。

二人の目が合つ、マサムネは笑つており、ノブナガは厳めしく睨んでいる。

「そいやあ！」

攻守が入れ替わり、マサムネの下からの突き上げ、その槍は正確にノブナガの喉元を抉るための進む。

が、ノブナガに切り上げにより、薄皮を裂く程度で、槍は逸れていく。

「つふう！」

ノブナガが逆胴を狙いに薙ぐ、しかしまサムネは後ろに下がることで、距離を取る。

戦いは続く、ノブナガが切り込めば、マサムネが避け、マサムネが突けば、ノブナガが防ぐ、攻守が頻繁に切り替わり、4合5合と鬪ぎ合いが終わることなく、己の命を乗せて相手の命を狩る死合いが続いてゆく。

ノブナガは攻めあぐねていた。槍の距離感が掴めない、近寄れば打ち払われ流される。遠くから牽制すれば、槍の間合いから手酷く反撃される。

槍だけでなく、マサムネ自身も上手いのだ。振り下ろせば、横に避け、横に薙げば、地に這う様に避ける。足を払えば、槍を使い天に逃げ、体術にて反撃する。どの様に攻撃しても変幻自在に避け、流され、払われる。一度距離を取らせてしまえば、相手のペースになる。

故の守り、如何なる攻め方でこられようとも、切つて落とす。波佐間の剣、即ち間の一太刀。守勢において力を発揮する、神速の居合い。対一において負けなし、対多でも守勢に周れば、何者も通さない、難攻不落となる。

マサムネも氣づく、ノブナガが守勢、ノブナガの円が展開した時、形勢が変わってしまったことに。苦手だったのだ、マサムネにとつて攻撃というのは、相手の隙を突き反撃し打ち倒す、だから自ら攻めるのは大きな隙作ることに他ならない、だから動けない。

両者の額に汗が伝う、頬を過ぎ、顎に至り、地に落ちる。

「（攻めれば、切つて落とされる。ただ待つ、最善の一手が出来る機会が来るまで！）」

片方が緊張し、機会が来るのを待つこの状況。

「（マサムネって切れ長な目してるな、睫毛も長くて顔も整つてるし、いかにももてますよ私みたいな顔の造りだな。妬ましい、シヤルにこの前貸して貰つた。エロゲの主人公みたいだな。段々ハラガ立つてきたぞ、よしいい事思いついた。隙をついて鼻を切り落としてやるつ。）」と、物凄く俗なことを考えていた。

どれくらい時間が経つだろうか。10分20分か？一人にとつてその数倍以上の時が流れただろう。周りで戦いの残響が響いても、近くをどこからか飛んできた巨木が落ちてきても、土煙がたちこんで二人を包もうとも動かなかつた。しかし、そんな戦いにも動きがあつた。同時刻でフェイタンが念能力を使つた時、それに呼応してメディアが念能力を使つた時、マサムネが動いた。

「（この時を待つっていた！メディアの能力で体が無敵に成つた時

を…）これで終わりだ！ノブナガア！」

マサムネの渾身の突きこみ、ノブナガが反応するもマサムネに当たる「ことは無い。

「何が起きた？」

ノブナガは困惑していた。さつき確かにマサムネの突きが俺に襲い掛かったと筈だと、俺の攻撃は何故かマサムネに当たらず、負けてしまった筈だと。一人が気づいた時、ノブナガはマサムネの槍を左手で掴み、マサムネは右手でノブナガの刀を持っている右手を押さえていた。

「（今のは、時がぶつ飛ばされたような奇妙な現象、キングクリムゾンか！なんてタイミングだ。仕方ないこの近さなら…）」『孤軍奮闘 ステゴロタイマン』

「なんだー？」

世界が無地の白に変わる、そこは100m四方の空間へと変わった。二人共絶の状態に自動的に切り替わる。一步進めば罠だらけの部屋になつた。

この部屋ではオーラを出すことが出来ない。周りは罠だらけ、しかもマサムネはどこに罠があつてどのように動くか初めから分かれている。能力の制限と不可視の罠。罠を踏んでも踏んだ感触が無いため反応が遅れる。相手に不利なように出来ている。

「マサムネが動く、一步後ろに引く。とつさにノブナガが動こうとするとマサムネの後方から矢が飛んできた。当然、マサムネは当たらない位置にいるのでノブナガは打ち落とす。

「ここでは、二人共強制的に絶になり、さらに周りには大量の罠が張られている。」

一気の距離を取った、マサムネは発動した罠である上からの落石をノブナガに向かつて弾く、ノブナガが避けるとトラバサミが発動し、足に食いついてきた。

「つづづー！」

「一度は無いぞ、ノブナガアー！」

ノブナガは足にトラバサミが付いたまま、刀を鞘に納め、居合いの準備をする。マサムネはノブナガに近づくと同時に矢の罠だけ踏んで肉薄する。

「それはもう見たぞ！」

「つしい！」

ノブナガは身体に矢が刺さっても構わず構えを取り続け、マサムネが間合いに入つた瞬間に居合い。

しかし、マサムネはそれを上回り居合いを避け、渾身の突き。

先ほどの焼き増しのように繰り返された戦い。先ほどの様に終わつたか分からなかつた。

マサムネは勝利を確信していた。

『秘技・燕返し』マサムネに襲い掛かる背後からの突然の衝撃、避けたはずの斬撃。

その斬撃は姿勢を低くして避けたマサムネの両足の腱を割いた。

倒れこむマサムネ、倒れた先に待ち受ける罠・落とし穴の中には身体を串刺しにしてしまつ杭が敷き詰まつている。

咄嗟に能力を解除する。景色が戻る森の中へ。

「ふう、危なかつたぜ。さてと他の連中は大丈夫か？」ノブナガはマサムネをほおつて置いて歩いていく。

「なんだ？ おかしいぞ目が霞む。」

しかし、矢に塗られていた毒により、倒れこんでしまう

森の中に倒れている一人、武術家としての勝利を制したのはノブナガであったが、敵の各個無力化という作戦において勝つたのはマサムネであった。

戦いはまだ続いている。

決戦 フィンクス ノブナガ（後書き）

ノブナガの念能力の補足です。

『侍魂』 - 絶状態でのみ発動、秘技が使えるようになる。

燕返し 背後から無数の斬撃喰らわせる同時に來るので初見殺し
秘技は他にある筈、そして発動条件が絶対的とかなりのロマン技
だから普段は使いません。あと今回マサムネは峰打ちされたでござる。

決戦 その他の人（前書き）

やつちまつた。16話です。いろいろすみません、読めば分かります。正直書かなくてもよかつた。

決戦 その他の人

Side フランクリン

「へー、フランクリンさんはシャル君と幼馴染なんですか。」

「あ、ああシャルは昔から狡賢くてな。ウヴォーやノブナガを口
ントロールして色々悪戯をしててな…。」

なぜコイツと話しているんだろうな？目の前にいる女、スパーと
いつたか、こいつは敵のリーダーの話ばっかりしゃがる。

…ああ、そうか腹を撃たれたんだつけ、銃弾には筋弛緩剤が入つ
てて動けないんだつた。遠距離射撃にはどうしようもねえな、ウヴ
オージャあるまいし普通に効くからな。

「それでですね。この前、フランクさんがナンパしてたんですけど、ふられちゃつたんですよ。まあ、なんですか滲み出る下心が悪いんですね？」

「フランクだか、シラネーがやり方が悪いんじゃねえのか？」

あー、他の奴らはビリしたかな。ウヴォーとか搦め手でやられた
か？

「この前のザパン市で料理対決の番組があつて、マキオさんと出
たんですけど、惜しくも準優勝でしてね。」

「どつかで見たことあると思ったら、炎の料理人グラントリーのマ
さんチームの人か。」

「ええ、そうですが、フランクリンさんも見るんですね。」

なんか久々に平和だな。一度実家に帰るかな。かーさん元気かな？

side クロロ

突然の襲撃、しかし予期していた奇襲だった。メンバーはバラバラに攻撃され、ちりぢりになってしまった。俺の相手は想定の範囲内。

「クロロー、仲間の仇取らせてもらひつー。」

「…。」

あらゆるもの反射する念能力者、なかなかに厄介だが倒せないわけではない。出来れば奪いたいところだが殺すしかあるまい。

「仲間の仇？」

「何だと！？」

「… そうか思い出したぞ。泣き叫んで命乞いをして、お前の言う仲間を裏切つて、死んでいった愚かな男のことだろう？ ははは！ 余りに顔がぐちゃぐちゃで思わず、踏み潰してしまったよ。」

「貴様あああああ！ 絶対に許さねえ！！！」

さて煽るだけ煽ったし、どうやって倒そうか。彼の能力の許容範囲を超える攻撃、彼の能力が反応する前に倒す、彼の能力を禁じた状態にするか。まあやり様は幾らでもあるか、一つ一つ試していくばいいか。

「命乞いの準備はいいかな？あの男のよつたね。」

「大輔のことかあああーー！」

俺はだれにも止められない。見ててくれ、パク。

side change アデル

一方アジトで一人を見張っているアデルはとこうど。

「ザバン市独占來たー！」

「おおー、またですか。（おっと、旅団が襲撃してきたようですね。）」
「くそ、シャルの癖に調子に乗って！」

「あ、マチさん。すみませんがノットリ君で貴方のパドキアの独占願させて貰いますね。（まず先手は私達が取ったようですね。）」

「ええ！ちょっと待ってよー！」

「アハはー目的地もーらい！」

三人仲良く、桃〇郎電鉄、ハンター編をやっていた。もともと、逃げる気の無かつたシャルナークとマチは丁寧なアデルの対応に悪い気はせず、好感をもつた。

「アハはー！これで俺の優勝は固いよー！」

「悪いね、ここで牛歩カードだよ！」

「ああ、なんてこつた！ロマス駅に挟まれちゃった。」

丁寧な接待に美味しいものを「」馳走され、見事懐柔された二人は暇つぶしのためにゲームをすることになった。

「ううう、現金が無くなっちゃった。」

「すみませんがシャル、貧乏神直撃カードです（真人、マサム
ネ、ノブナガ、フランクリン、ボノレノフがリタイア。フェイタン、
フィンクスが死亡）ですか。別に仕事は撃退だから殺さなくても良か
ったんですが、まああの二人は扱いづらいですからね。）

「げげげ！貧乏神が憑いちゃった。」

アジトの一階、食堂の隣の部屋の居間、そこには大量のゲームや
ビリヤード、ダーツ等の遊具が置いてあった。テレビの前のソファ
一で三人は寛ぎながら、ゲームをプレイしていた

「ふつふつふ！シャルー。」

「うう…じうしたのさ。マチ…。」

「一生のお願いカード！」

「ぎやああああ！キング様あーー！」

「キヤーキング様！！！」

初めはマチが優勢に動いていたが、シャルナークが進行形を集め、
怒涛の目的地あさりを行う。アデルは地味に一位を保ちつつ、妨害
カードを集めていた。その結果が

「あーーーーーーうんちに挟まれた！キング様に憑かれてるのに…

ああ、ここでフィンガーフレアボムズとか…。」

「シャルぞまあーーつて銀一さん！全額だけは、全額だけは、あ
あ…。」

「じゃあ、わたしは物件でもありますか。」

二人に大差をつけて、優勝したアデルであった。アジトメンバー
はアデルとは絶対に人生ゲームや桃鉄など、運が大きなウェイトを
占めるゲームをやらない、彼が強すぎるからである。ついたあだ名
がリアルサクマである。

s i d e e n d

決戦　圧倒的なほし（前書き）

これがやりたくてハンターUUを書いていたんですよ。17話です。

決戦 圧倒的なほど

side ウヴォーギン

ウヴォーは気づいた、森の音に混じる、不自然な衣ズレの音。ウヴォーは感じた、自分達に物凄いスピードで近づいてくる奴を。ウヴォーは近く奴が今までの敵の中でピカイチの実力を持つことに歓喜した。

「ヒョー…」

「（速い！そして重い！）」

背後から迫る、影。そして衝撃。相手の攻撃を感じ取つてガードした腕」と持つていくほどの蹴り、衝撃を受け止めきれず体が真横に吹っ飛んでいく。木の枝にぶつかりながら飛ばされる。

「中々良い蹴りしてんじゃねえか（腕が痺れてやがる。）」

「そつちは中々頑丈だね。」

ウヴォーの目の前に現れたのは、顔に笑みを貼り付けた、優男であつた。

「てめえは楽しめそうだな。（こんなヒョロッとい奴が…あんな蹴りを？そんな強い念を感じなかつたが、いやほとんど感じなかつた。アイツは絶での威力を出したのか？なんらかの能力と見たほうがいいか。）

「お手柔らかに頼むよ。」

「（うせとくせえな。）

睨み合ひ、言葉で相手の手の内を探ろうとしても効果は無く、挑発しても無意味だつと当たりをつけ、一気に両者は戦闘状態に入る。ウヴォーは爆発的にオーラを出し、堅をする。一方、マキオはオーラを脈打つように緩やかに流していく。

「そういうば、船乗つてなかつたね。俺はマキオだよ。」

「そうだったな、俺は「ウヴォーギンだろ?」やっぱり知つてやがつたか（なるほど今回の奇襲は計画的だつたわけか…。）なら遠慮はいらねえなっ！」

ウヴォーが地面を踏み砕き、マキオに突進してくる。爆音と共に高速で走り、そのままの勢いで無造作にぶん殴る。

「激流に身を任せ。」

力の限り握りこんだ拳は、流され。

「同化する。」

「ガアッ！」

後頭部に裏拳を当てられる。ウヴォーの身体は勢いを殺せず、大木を薙ぎ倒しながら前進する。ムクリとウヴォーは何事も無かつたかのように起き上がる。

「頑丈だね。」

「ふんっ！（頭がズキズキしやがる、あんなちつぽけなオーラで俺の堅を破りやがったのか…。）

先ほど変わらないように、ウヴァーが突進する。だがウヴァーは攻撃の間合いに入った時、マキオに組み付こうとしたックルを仕掛けてきた。

「掴んでしまえよ」ひのもんよー。」

「クフフ。」

マキオの胸倉を掴んだ、ウヴァーであったが直ぐに離してしまった。後ろに下がるウヴァー。距離を取るウヴァーの手首は外れてしまっていた。

「くつー！めえ、何しゃがつた。（気がついたら、外されてたぜ。）

「クフフ、いやいや余りにも隙だらけで、つこやつてしまつたよ。」

「

「キッ」「キッ」と手首を嵌めなおすウヴァー。警戒して近づくビリカ、後ろに下がつ手しまつたウヴァーとむづくつと近づくマキオ。

「攻守交替だよ。」

ぬるつと音がするような、滑らかな突き。咄嗟にウヴァーは避けてしまつ、速さも力も踏み込みさえしていないような崩拳を、葉に枝に幹に当たるつと構わず避けてしまつた。

「おや？ビリしたんだい、さつきまでの威勢は何処に行つたんだい？」

また踏み込み、中段突き。避ける、あの拳に当たることを避ける。

マキオが攻撃すれば、避けるウヴォー。何度も繰り返される光景、やがて周りに立っている木が無くなり、倒木で足の踏みどろも無くなつた頃、傷だらけのウヴォーを見てマキオは

「そろそろ飽きたよこの展開は…」

地面が揺れたかのような震脚、巨木の幹を踏み込み、抉れる。巨木は周りの木を巻き込んで起き上がる。ウヴォーの眼前に現れたのは木の壁、マキオの姿を楽に隠し、攻め手が分からなくなつてしまふ。そして瞬間的なオーラの高まり。

「ちつ！ 何も見えねえ！（何処から来る、正面か上か横か。）」「どっせい！…」

マキオの拳は地を碎き、大きなクレーター、そして衝撃波が周囲に放たれる。その衝撃波によつて起き上がつた木がまるでバリスタの砲弾のように弾かれる。

周りは戦争しているかのような、破壊音を撒き散らし、砂煙に混ざつて土砂が降り積もる。やがて煙が晴れた時には驚きべき惨状が広がつていた。

「マジかよ…。（20…いや30メートルくらいのどでかい穴が出来てやがる。ありえねえぜ、もしあれを喰らついたら…。）」

ウヴォーは目の前の光景が信じられず、呆然としていた。それは大きな決定的な隙であった。

「隙有りだよ。」

衝撃！隙を見せた、ウヴォーであつたが、今まで避けに避けてマキオの攻撃の呼吸を感じ取ることが出来るようになつたウヴォーは維持していた堅を一箇所に集め、ガードに回した。

全力で凝！振り返つた、ウヴォーはマキオの前蹴りを左腕を犠牲に耐えた。ウヴォーの莫大なオーラをまるでフェンシングのように鋭い蹴りは貫き、腕に突き刺さつた。蹴りの衝撃はウヴォーをぶつ飛ばした。

「えきつ！」

痛みがウヴォーの精神に直撃した。確かにマキオは強い、己よりも遥か高みにいる。しかし、逃げて勝てる相手だろうか？たとえ兎と獅子のように力が離れていようと逃げていいいのだろうか。そんな訳が無い、さつきまでの己は戦いから逃げていた。

「（アイツにビビッてた、認めよう俺はアイツを恐れていた。）

革命、ウヴォーに意識に革命が起つっていた。恐怖に立ち向かう大きな一步、人に許された高度な精神状態、追い詰められ恐慌状態に陥つた時の反射でも、慢心からなる蛮勇でもない。それは勇気、恐怖に立ち向かう氣概、敵の恐ろしさを感じ、自分の力量を把握し、判断する。

「（強くなりてー誰よりもマキオよりもだ！）」

ウヴォーの身体に変化が起る。筋肉が隆起し、締まっていく、身体は大きくならず、ただ強靭に、強固に、頑丈な筋肉構造に変わつていく。今までに無い昂揚感がウヴォーを高みに引き上げていく。

「ウオオオオオオオオオオオオ！――！」

自分に対する怒り、マキオに対する恐れと尊敬。爆発した。

マキオの視認スピードギリギリの速さで動き、今までの倍近いオーラでウヴァーがマキオを殴る。

「チツ！」

殴られた衝撃を消力で完璧に流し、そのままの勢いでウゾーに回し蹴り。

「驚いたよ、全然動きが違うじゃないか。」「ガアツ！」

ウヴァーの堅牢なオーラはマキオの攻撃を防ぎ、攻勢に転じさせ
る。腕を真上から降り下ろす一撃、それすらも消力で流し、左回し
蹴りをウヴァーの頭に与える。ウヴァーも少しげらついただけで立
つている。

「（効くゼーマキホせどいひやつて殴りてこるんだ？）」

ウヴォーの右ストレート。それは明らかな進化だった。技術を感じさせるものだった。動きに合わせて反撃を食いつくも今度はぐらつかない。

「（もつと速くーもつと強く踏み込むー）」

ウヴォーの回し蹴り。完全に力の乗ったその蹴りはジャブの速さを超える、震んでいた。さつきよりの強い反撃をされてもぐらつかない。

一人は疑問に思った。余りにも速い成長速度に。そなぜならウヴォーが無意識に作り上げてしまつたからだ。ウヴォーの向上心が生み出した念。

『闘神演武』-戦うことにより戦闘能力を高める、相手に勝つか自分が負けるまで効果は続く。制約、自らが格上と認めた相手でないといけない。

ウヴォーのメモリを全て喰い潰して発動できた。この念は、今この場で大きく効力を發揮する。マキオの慢心がウヴォーを進化させた。最早、ウヴォーの拳はマキオに届く。

「（マキオは構えてから打撃が当たる時、ギリギリまで脱力をしている。俺にも出来るはずだー）」

「これは驚いた。」

パンッ！-という空気が裂ける音。ウヴォーの手に広がる確かな手応え、拳に付いた血の跡はマキオのもの。マキオの頬に傷一つ、ウヴォーの拳がマキオを捉え始めた。

「ぐあああー！」

ウヴォーの肉体に起る、筋肉の超蠕動、マキオの業を再現する

ために必要な物と不要な物に分けられていく。盛り上がった筋肉は贅肉と判断され落ちていき、肉が締まりその様は金属のように変わつていく。柔らかくしなやかである反面、剛性も併せ持つ、日本刀のような身体へと変貌していった。

「シツ！」

ウヴァオーが拳を足を振るうたびに、マキオの身体は軋み裂傷が増える。卓越した足捌きや構えは既に達人の域、その常人離れした身体能力は最早人ではなく、いうなればそう鬼、オーガである。マキオが消力で対抗しようとも速さ、力において及ぶべきも無く、技術でさえも恐るべき勢いで駆け上つてくる。

「はつ！」

「ふつ！」

マキオの掌底、ウヴァオーの胸元に吸い込まれるような一打は新たな衝撃をマキオに与えた。インパクトの際、その寸前で行われた、刹那の脱力、ウヴァオーの消力が衝撃を殺した。いまだ拙い出来ではあつたが、紛れも無く消力であった。

「（まだだ！脱力しきれていねえ、でもこれは俺の性に合わない。もっと俺に合うものが在る筈だ。脱力だ、何だと小手先の技術じやない何かか。）」

「てめえ、調子こいてんじゃねえぞ。」

マキオのオーラが歪む、先ほどまでの攻防一体ではなくより攻撃的に圧力を増した。ウヴァオーは感じた、マキオの力の解放を、それに呼応するように自らの肉が次なる者へと換えようとしてきた。内なる力の解放、身体を力に預ける。身体をより効率よく動かすので

はなく、任せてしまう身体に動いて貰う、本能で戦い、頭は判断するだけでよい、身体がいつている任せろと必ず目の前の奴を完璧に超える肉になるからお前は考えるだけでいいと。ならばそつじよへ、ウヴォーは更なる高みへ昇る。

「調子こかせてもらひづ、ぬりやああああああああああああああ！」

「おおお。」

盛り上がる筋肉、瘦せて全身が筋の様になつた肉は三度変貌を遂げる。驚異的な贅力を産み出すために筋肉を増やす、筋密度はそのままに。動きを阻害しない程度に増えた肉はウヴォーを戦闘形態に変えた。背中の筋肉が産み出したのは鬼の形相、怒り猛る憤怒の顔がマキオを睨む。

「ゼリやあああああ！」

構えをせず、自然体からの渾身の一撃は、正に暴風、人の身で在りながら最早災害レベルにまでなつた、これは容易くマキオを吹き飛ばした。地面と平行に飛ぶマキオはその辺に転がっている夥しい木の山へと突っ込んでいった。

決戦 シンプルな攻撃ほど効く

そこいら中に木片が散らばり、ウヴォーが様子を窺う。

「（手応えあり！）どれくらいダメージを『えられたんだ？まだ終わらないで欲しいぜ。マキオ！俺はまだまだ強くなれるぜ！』」

不意に感じる、膨大なオーラの高まり、危険なほどのその力は気の向こう側からする。

「！」のオーラは…フェイタンの奴か！（不味い！マキオの奴じや、耐えられない！ちつ！フェイタンの野郎やるならもつと離れてやれつてんだ！」

破壊的な熱量が吹き荒れる、空気を焼き尽くし木々が消失した。ウヴォーは地面を碎き、その穴に入り、呼吸を止めて限界ギリギリまでオーラを放出して防御に入った。

フェイタンの人為災害は一瞬で過ぎ去った。フェイタンを中心として森は荒野と化していた。

「なつー俺のオーラが減っていく！」

「どうやら、その能力まだ制御できていないようだな。」

マキオに喰らわせた、ウヴォーの現在の最大の攻撃、そしてトドメのフェイタンの能力が加わり完全に気が抜けてしまい『闘神演舞』が途切れてしまった。無意識の内に創られた、能力が途切れてしまうのは当然、本能が望んだ能力は我に返ってしまえば制御不可。

「いやー中々楽しめたよ。」

「ぐえーー（コイツー空我が無くなつてやがるー）」

マキオがウヴィオーに対して上から覆いかぶさるようにギロチンチヨーク、何とか引き離そうとするも、マキオのテクニックがさせない。

「（頭が・・・。）」

「君の強さは予想外だつたけど、想定の範囲内ではあつた。」

遂に膝を付いてしまつウヴォー、顔が真つ赤から青く変わつていく、マキオの腕を引き離そうとしていた手は振るえ力なく落ちていく。やがて身体に力が入らなくなり、意識がとんでいった。

」。」

「ふうー・・・・・疲れた。うーんウヅオーギンを鍛えていつたら、コピー位なら超えられそうかな?強化され続ける強化系が、なんかカッコいいな。」

マキオを追い詰めたウヴォー、しかし結果は無傷で終了。手加減されていたものの最後にはマキオの本気まで迫り着いたその成長は驚異的、たかだか一時間にも満たない戦いで常人の一生分以上の成長をしたウヴォー、天晴れ！

金属音、炸裂音、爆音、森の中では普段ではありえない音が流れている。

「クロロー逃げるのかー」の臆病者！

「反射なんてしてお前程じゃないね。（完全に頭に血が上つていてやりやすいな。）」

真人は無傷、対するクロロは所々傷があるのが見える。クロロが何処からか取り出したナイフを死角から投げるも弾かれる。真人は投げられたにも係わらず全く気づかずにクロロを追いかけ続ける。

「お前、綺麗な顔しているな。実は女なんじゃないのか、ああ、なるほどだからそんなに怒つているわけだ。恋人だったのか。（あの能力は無意識なのか、厄介だな。）」

「ふざけるな！俺は男だ！」

「ああ、ホモなのか。（さてどうしようかな？）」

「キサマアアア鳴呼！！」

時間を忘れ、クロロを追う真人、真人の執念、いや怨念といつてもいい怒りから逃げ続けるクロロ。

「おやおや、女のヒステリーは怖いな（となるとオーラが無くなるのを待つか、能力を上回る攻撃かな？）」

「クウロオロオオオオー！！！」

真人のベクトル操作による攻撃も怒りとクロロの素早い動きで定まらず、当たることがない。

「はあー（この膠着を何とかしたいのだが、何か無いかな？・・・・・・・・このオーラはフェイタンか、使えるな。）」

クロロがページを捲り、フェイタンとは正反対の方向へ石を投げる。膨れ上がるオーラ、フェイタンの念を感じながらそつちへ走る二人、当然真人も気づいたが構わず向かう。

フェイタンの能力が発動、それに合わせてメディアの能力が発動する。フェイタンの炎を反射し、メディアの無敵回復も反射する。そして堅で耐えていたクロロが動く。

「『キングクリムゾン』！…」これで奴は俺を知覚出来ない。ふむ、今のところ全部反射しているがずいぶんと辛そうな顔をしているじゃないか。」

クロロが時をぶつ飛ばす、このときクロロは誰からも干渉を受けて、自由である。

「フェイタンはもう其処まで敵が迫っているのか…。」

クロロが見たのはフェイタンの最後の時、彼しか知覚できない仲間の死の目撃であった。仲間の犠牲を無駄にしない、そう思つたクロロはダメ押しをする。

「許容範囲ギリギリといつたところか、単純な威力ならこれだな。
『爆裂呪文・バーストロンド』！」

フェイタンが死ぬギリギリでクロロはページを捲くり、真人の背後から巨大な火球をぶつける。その熱量はフェイタンのに劣る物の決定打には違ひなかつた。

限界を超えた真人は炎に包まる。

決戦 シンプルな攻撃ほど効く（後書き）

ウヴォーは勇次郎 + オーラな感じです。永遠に成長期なウヴォー、きっと強者と戦い続けたら最強になるんじゃないですかね。

はい19話です。連投終了のお知らせ、また不定期更新の始まりですよ。

ちなみにコメントして下さるとストーリーを考えるのが楽になつて変化が起きますよ。今更じつたのはマキオ VS ウヴォーは絶対にやりたかったからです。

それにもエルシャダイがランキング落ちしませんね。・・・
実は社員の人気が工作してるんですかね？

兄妹がモンハンカードを買うみたいなんですが、私はPSPを落としてRAN機能が壊れてハブられる予感がびんびんです。
・・・あとは特に書くことはないでつかね。

決着（前書き）

ブラックドパラドックスはイーノックの能力です。二つ名メーカーをイーノックでやつたら出たので採用しました。しかし、今更ながらイーノックを出したことが恥ずかしいです。そして20話です。前回、あとがきに書いたようにネタが無いので、このまま原作はいる前に完結しようと思います。続ける、馬鹿野郎！と罵つて貰えれば続きを考えますがね。

あとこの作品は多少の原作ブレイクを含みますのであしからず

決着

炎に包まれる真人、突然自分の許容を超えた業火に巻かれ、なすべが無かつた。冷静さを欠いていた真人はパニック状態に陥り、死の手前まで来ていた。

「役に立たないなあ。 しあわがない、私が殺るから下がつててよ。

「ヒューヒュー。」

ポンズが短刀を振るうと炎が消失してしまつ。フュイタンを始末した彼女は近くで戦っていた二人が来ているのを確認していた。

「あんたがクロロね、残念だけど此処でゲームオーバーよ。」「どうかな？（『エピタフ』一なるほどね。）」

青い目を輝かせて一気に急加速するポンズ、対するクロロはペー
ジを捲り攻撃に備える。

「（貰った！？）

「位置変換対象は《クロロ》と《投げた石》」

『歪んだ錯綜・ブラッティパラドックス』視認範囲内もしくは特定範囲内の自身に関連があるものに対しても効果を及ぼす。位置変換、自身に関連のあるもの同士の位置を交換する。位置変更、自身が視認しているものを視認範囲内で変動させる。

先ほどまでクロロがいたところには小石が浮かび、ポンズの斬撃はその石を割く、さつきの石が転がっていたところにクロロは立ちページを捲る。直立不動、衣擦れの音以外の音はしない。

「（『ヒピタフ』で未来視をした時、女の短刀を持っていた腕は無くなっていた。未来視は絶対に起ころる事柄、俺が何らかの攻撃で女の腕を落としたということだ。しかし俺は今、刃物や何かを切る能力を持つていない、だから他の方法で落とさなければならない、女の腕を。あの女は近接に特化しているように見えた、『キングクリムゾン』なら女の能力は無力化できるか。）

「避けられた！？ならもう一度！（クロロが一瞬で移動した、あれはもしかして原作にあったあの能力かな？でもノブナガのように私ではなくて自分を移動させたのは何故？）

燃え尽きた森で二人が対峙する。かたや直死の魔眼を持つ近接特化型のポンズ、かたや相手の能力を盗み、使いこなすことによって近中遠距離すべてで戦えるオールラウンダーのクロロ。ポンズの攻撃は避けられ、戦法を読まれてしまう。しかしポンズは近距離でしか力を発揮できないので近づかなければならず、逃げるにも先ほどの能力で回り込まれてしまふだろう。

ポンズの頭の中では、クロロの作戦「こと殺すしかないと考え付いていた。

「ふつ！」

一気に近づき、切りかかる。あと少し、あと一メートル。其処まで近づいた。しかし現実は無情である。

『『キングクリムゾン』』

体重を乗せた逆袈裟切りを避け、返しの右薙ぎ払い、手先を狙つた切りつけ、急所目掛けた刺突、全て合わせて一七の斬撃は虚しく空を切る。

そしてクロロの傍に現れた赤い巨人が手刀を振り下ろす。

ポンズの腕が落ちる、斬るのではなく、力で肉の纖維を捻じ切り引き千切る。盛大に滴る血液、止まることのない勢いにポンズはただ呆然とした。そのあと、膝を付き何とか血を止めようと抑えるも一向に留まることが無い。

「私の腕が…。」

「お前に残された時間は・・・そうだな、あと五分少々かな。まあ、残り少ない時間を楽しむことだな。」

クルリと振り返り、真後ろに居た人物と目が合ひつ。

「あら、ばれちゃった。」

「『キングクリムゾン』！」

「おそいつ！」

鮮血が飛び散る、クロロの胸を貫いた腕を抜き、ポンズの方へ歩くマキオ。

唐突な登場、気配を殺し、物陰に潜み、太極拳のよつてゆつくりと迫る。

飛ばされた時間の中でも動きは変わらず、近づくチャンスを窺う。

そしてクロロから警戒が無くなる時を見計らい、急接近、死角を通りクロロの背に迫り着く。

「（突かれた！全ての能力の死角を突かれた！）どうやつて判断したか分からないが完全に読まれていた。『エピタフ』は少し先、十数秒先くらいしか分からず。『キングクリムゾン』は発動までにタイムラグがあり、しか�数秒しか持たない。『ブランディバラドックス』等他の能力はページ捲らないといけない。完全にしてやられた！」

「ポンズ、動脈性出血の場合の止血方はこうやって腕を……。
。」

クロロを無視し、ポンズの応急手当をして、どこかに連絡をし始めるマキオ。

「（このまま俺は死んでいくのか！）」

胸に大穴を開け、虚ろな目でマキオを見るクロロ、もはや助からない量の出血をし、もう直ぐに出血死しそうとしている。

ポンズは余りの出血でショックを受けていたがマキオに話しかけられ、徐々に平静を取り戻していく。

「（いいのかこのままで！いや駄目だ！俺をやつたあの男は絶対に殺す！）

クロロの目が少しだけ力を取り戻す、冷えていくからだの中で頭だけが沸騰しているかのように熱い。

『『キングクリムゾン』』

最後の力を振り絞る、オーラを滾らせ、能力を発動する。マキオが気づき、ポンズを突き飛ばす。

『『レクイレム』』

クロロも赤い巨人も身じろぎもできなかつたが、消え逝く意識の中で確かに力を發揮した。

空間消失、問答無用で範囲内の対象を全て吹き飛ばす。マキオがいたところは地面ごとホツカリと無くなつてしまつた。この時、マキオという人物は消えてしまつた。

旅団との戦いは一応の解決を見る、被害はマキオを除いて少なく、クルタ族の損害は無く、近隣の森の一部が焼け落ちただけという認識だつた。

こつ甲の日常（前書き）

間髪を入れない連投です。21話は短めでヒローグ的なものです。

表にならない、旅団と転生者との戦いが終わり、いつもの日常に戻る。

各々が自分の住処に帰り、安心を得る。一人欠けたことに一抹の違和感を感じながら。アジトに帰り、日々の生活えと戻る。そんな中、アジトに残り戦いに赴かなかつたアデルが帰つてきた者たちに問う。

「あれ？ スパーはどうしたんだい？ 一緒に帰つてきていなかい。」アデルがアジトにすっかり馴染んだシャルナーケとマチを引きつれやつてきた。

「そういうえば、見てないな、メティアは知つてるか？」フランクが答え

「えつ？ しりませんよ。ポンズさんは何か聞いてますか？」メティアが困惑し

「そんなことより、マチだつけ？ 腕をくつつけられない？」ポンズは痛み等でそれどころではなさそうだ。

「御代は貰うよ、でも腕が死んでたら意味無いよ。」マチはスプレーの事など知らないので、そのままスルー

「アイスボックスの中で氷漬けにしておいたよ。」ヒソカがマチに歩み寄る

消えてしまつたスパーに疑問を持つも此処はハンター世界、皆比較的ドライなのだ。

「ふつ
ふく
ん。」

「ヒソカ、何してるの？」

「いや、久しぶりにモタリケに会つてこうと思つてね。結婚し

た／＼一か／＼お祝いもしたの／＼。

「三タリアのあの運送会社の？」

モタリケンでの運送会社の

— 応原作にも出てきたんだけれどね

ヒソカとポンズは旅支度をしながら、話している。

「ねえ、アーテル」の部屋は誰のなの?」

「なんだいマチ・・・あれ?こんな部屋あつたかな・・・。」

「誰のでもないなら此処はあたしの部屋で構わないでしょ？」

「まあ、いいと黙った。誰の部屋だつたかな、舜はスーパーの部屋

レラの思ひ

順調に馴染んだマチはアジトに住むことにしたようだ。そしてアーデルはポツカリと抜き落した記憶に疑問を持つ。

この部屋の主は消えてしまった。戸籍も親しい人の記憶も彼が残した筆跡、指紋、音声、この世界にある彼の痕跡は跡形も無く消失した。

『キングクリムゾン・レクイーム』は時空間を吹き飛ばす能力、彼の痕跡は消え、彼が成した結果だけが残つた。誰も彼のことを思ひ出すことが無く、暮らしていく。

II II

モタリケは美人の奥さんの力で発展した会社を必死で支え、それなりに幸せに暮らしている。

ヒソカとポンズは結婚はまだしていないが互いに気の置けない関係になつていて、あとは時間が何とかするだろう。

フランクは何時も通りナンパに出かけ、玉碎しており、メディアは何で自分がメイド服なのか理解できないが、フランクと下ネタを話して楽しくやっている。

アテルは家を継ぎ、とても忙しい毎日を送っているがたまにアジトに足を運んでくる。

マサムネはノブナガや超進化したウヴァーたちを戦いの日々を送っている。

シャルナーカなどの元旅団メンバーは今もまだ盜賊家業を送つているそうだ。

だが皆に悲しい報せが舞い込んだ。スパーが見つかったそうだ、傷一つ無い、変死体、何故死んだが分からぬそうだ。

しかしそれ以外変わらない毎日、この先も大きな事件があるのだろうが、そんな物は今は関係ない、ただ続していく毎日を楽しんでいく。

えー皆さん、ここまで見てくださつてありがとうございます。無事、完結ということで異論は無いみたいなので此処で終わりにさせてもらいます。

この物語は主人公が転生し続け、自分を探していくという感じのコンセプトで考えており、ハンターハンター編は威力偵察、つまりプロローグであり、例えるならディスガイアの天界ルート、ジョジョヨでいうディオが吸血鬼になつた辺り、はじめの一歩のA級トーナメント、ベルセルクの黒の剣士編でしかありません。

拙い文章力ですがこれからも見て貰えるとともに嬉しいです。ええ、ホントに最初に1000PVいつた時とか小躍りしましたからね。59・368PVありがとうございます!!

それではお楽しみ下さい。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

・・・なにか変な電波が飛んできたような・・・気のせいかな。

俺はマキオ、前世は佐久間修一っていうんだけど、まあ如何でもいいかな?死んじゃったし、まさかバスで居眠りしてる間に事故が起きたなんてね。

そんなことより、俺転生したみたいなんだよね。薄々、こうなるんじやないかって思つてたけど、だつて俺には奇妙な能力があるから、『先天的魂魄塑性』つまり前世の記憶や経験が具わるといったもので、大してすごい能力じやないけどな。

俺は所詮凡人、魂だつて凡庸なものでね、大体が一般人だつたらな。だけどテストは楽だつたなあ。でも一人だけ大物がいたんだ、凡人でありながら、強さを求め続けた人物、あまたの天才、奇才、達人、猛者を破り、人生で敗北は一度だけ、地上最強と対峙しながら、勝利を得た人、武に全てを捧げた探求者。

武の体現。『郭海皇』中国拳法の頂点、究極の武、国手。異名は様々ある、まさに超武術家だ。

それにもしても漫画の人物が前世だつたことにその当時は、驚いたね。彼の歴史は武との歩み、とても常人には真似出来ない代物だよ。才能や身体能力は並程度だつたけどね。そんなわけで俺は武術チートがついているんだよ。それで

「いやー、まさか修一が死ぬとは思わなかつたにゃ。」

「あああ、邪魔しないでよ。というかこっちに来れたんだね、最上さん。」

「いやだにやー、最上さんだにやんて、美冬つて呼んでにや。」

この人（猫）は最上美冬【もがみみふゆ】前世ではいわゆる幼馴染である。なんで猫なのかというと彼女は俺の能力で前世で邪神だつたことに気づき、一気にヤバイ存在に成りあがつてしまつたのだ。

今は猫に分霊（自分の魂の一部）を乗り移させているようだ、前世でもやっていたから、俺でも分かる。

「で最上さん、何か用ですか。」

「修一のいつけつずり、「こっちではマキオといつてください」にや～言葉に棘があるにや。しょづがない、説明するにや。マキオを此処に巻き込んだのはこの世界や周辺世界を管理している高位精神体にや、それでそいつの力が欲しいから私に協力するにや…」

「べつにいいですけど、そんな人がいるなら俺たちのことば簡抜けなんじゃないの？」

「ふつふーん、情報ブロックするくらいなら楽にや仕事、しかもちゅうどいい感じに管理者が逝つちゃってるにや！これは千載一遇の大チャンスにや！」

「なんでそんなことになつてるのさ？…とこづか何故そんなことをしつてんだよ。」

「マキオ、素に戻つてるにや。私はぐだけてるのもいいと思つにや、何で知つてるかと言つとなんと実際に管理者を逝かせた人物に聞いたにや、三途で。」

「なんか卑猥だな。」

最上さん・・・いやモガミを仲間に俺はハンター世界に足を踏み入れた。

アイジエン大陸、クワライン公国、トンド地区。

ここは世界でも群を抜いた危険地域である。およそ東京ドーム7個分の広さのスラム街は警察でも避けて通り何時何処で犯罪が起つても不思議は無い無法地帯である。

そんな所に一人はやってきた。

「モガミよ、こんな所に転生者がいるのか？」

「いやー、邪神嘘つかないにや。」

「信用できねー。」

スラム街を歩く二人、何度もスリやら怖い人にあつたがのしていつた。

「こっちから、ビンビン感じるにやー。」

脇道に入り、裏路地を歩いていく、すると前方に倒れている女の子がいた。

「こいつはひでえや。」

「いやー、目標発見にや。」

「どうみても死んでますありがとうございました。どうすんだよ、

さすがに死体は味方になんねえぞ?」

「いやでいいのにや、生きてる奴は信用できないのこや。こやつ
いやへん、ネクロノミコン! これで復活させてヒトカタにするこや。ち
」

「（）じゅ田立つから、その辺の民家を占拠するか。」

ホントにその辺の民家の住民を縛り上げて軒先に吊るした二人は
反魂の儀式に取り掛かった。モガミが怪しげな呪文を唱え、不思議
な踊りを踊った。

「（猫が）一足歩行でムーンウォークとか見てて面白くな。（）

「いやへん、これでいい筈だ。せこせこせこせこせこせこせこせこ
るこや。」

「あつーはいー！」 ガバッ

外伝 極悪の華その一（後書き）

この物語の主人公が裏でどんな動きをしていたか、それが外伝です。

さあ22話です。この外伝が終わったら次の転生をさせます。候補はラジアータストーリーズ、史上最強の弟子ケンイチ、ネギまつ！です。これがいいとか、できるならコレッ！があれば、感想に書いてください。

感想が無く、他に書きたいものができたらそつこにしますんでしょう。

外伝 極悪の華その2

おはこんばんちわ、わたしです。前回、次の話の題材を書いたんですが、特に反応がありません。考えましたんですが、62・518PVも見られている 反応は無い 最近の話は見ていない 皆途中で挫折した 今書いてる話は見られていない 好きにやつて良し! とこりうことですね。

とこりうことは、とこりうとまだよ? いろんな話を赤裸々に書いても誰も見ていない、自分の部屋みたいな感じですよ? 私がおっぱい! とかいつも問題無い、逆にストレス解消でお肌艶々でキャラシュマチャーン状態です。

如何でもいいことですが、マウカブ3でシユマゴラスがダウンロードキャラクターで出るそいつですね。もし、ネット対戦でシユマちゃんに出会ったら手加減してくださいね。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

・・・また電波が・・・

「えつと・・・あの。」

「はや～～～。」

「ハイツーッてね! つかやんか。」

「ネ」「じやない」に「やー・美々ちやん」に「やー・」

「わひゅー・しゃ、喋つた!」

そんなことよりも授業中居眠りしてるとこを先生に咎められた
学生くらこのキャラがふりを疲労してこる女の子を落ち着かせねば

「やあ、お嬢さん、頭の調子は大丈夫かい?」

「いやー、前世とキャラが違つしナチュラルに毒舌。」

「黙れ、クソぬ!」。

「・・・前はもつとダルセウでも優しかった」。

俺は能力の性もあって、身体に引かれられてるだけなんだからなー!
ちよつと口が悪いのは此処が殺伐としてから移つただけだからな、
キャラが定まってないとかそんなんじゃないんだかんね!

「頭ですか?大丈夫だと思いますが・・・もしかしておかしかつ
たですか!?」

「ほり、マキオのせいで余計混乱したにゃ、粗茶しかないけど、
これで落ち着くこと。」

「それこの家にあつた奴だろ。」

「あつあつがとう!」やこますーーーあれ?わたし死にませんで
したか?」

「おい、もがみ」「イツ記憶が残つてゐるみたいだぞ。」

「蘇生の儀式は、彼女の身体を元に構成しなおしてゐるのさ。だから肉体に刻まれた、強い記憶、残留思念、たとえば殺された時の恐怖とかは残つてゐる場合が多いにこゝや。それに残つてゐる方が何かと便利にや。」

つまり彼女の肉体を再構成する上で身体を構成する因子として除去しなくとも影響が少ないのである。女の子の顔が青褪めて震えてるなんかなりのアラウマみたいだ、やっぱり除いたほうが良かったんじやないか？

「ほりマキオ抱きしめやんこ。」

「・・・もしかして、分かつてやつとしたのか？」

「儀式を行つたのはわたしたち、さあさあ彼女に楔を早く打ち込むことや。」

「わあ、なんて悪い奴なんだ。これつて洗脳だろ？まあ、顔とか結構可愛いから役得けやあそくなのかな？」

「やつ放してーこやああああーーー！」

「（優しく、丁寧に赤ちゃんを抱へたりじつかりと抱きしめる。）

（ ）

「うひうひうひ、ぐすり、やめつて、くだりやこつ。」

「落ち着いて、俺はそんなことしないよ。（優しく諭す）話しかける。」

「落ち着いたら、その血とか精液とか洗つてあげて。私はそのままの服を探してくる。」

もうこいつで、もがみほどこひこひこ。たぶん何処かの家から盗んでくるんだろうが、一足歩行のネコは違和感がすごいぞ。

それから彼女、スパーを入れて話をした。えつ？洗つてって頼まれてたつて？まあ、一緒に入つても良かつたんだけど、ほら言ひじやないかYOSHIOロリータNOタツチつてね。ロココンは犯罪者ではない！ペドフェリアが悪いんだ！

はあはあ、ふう。失礼、ちょっと興奮してしまった。えーっと彼女の説明をするよ、彼女は転生前は〇〇をやつてたんだつて、覚えてるかな？バスに乗り合わせた女性、それがスパーだつたんだよ。彼女はスラムの母子家庭の〇〇に転生してそれなりに幸せに暮らしてたんだつてさ。ハンターハンターのことは、全然知らなかつたそうだよ。

「ヒヤはーん、もつてきただよ。」

「ねかえり（手が赤いな、鉄臭いから血かな？）」

「最上さん、お帰りなさい。」

「ヒヤん、最上じゃなくてもがみんでも美冬とまでもみーひやんでも好きに呼んでいいこや、そんにこや、口元を着るヒヤー。」

「ありがと」^ハ^ハ もす…」

「^ハ^ハ や、それでマキオは今ビリ^ハ住んでる^ハや？」

「原作で幻影旅団がアジトにしてた所。」

「…いのか^ハ や? 奴らが来たら^ハいわぬ^ハや?」

「クロロを殺して、追い返したら大丈夫じやないか?」

「^ハ^ハ や、やつぱり思考が過激になつてゐ^ハ^ハ ゃん。でもカツ^ハ いからそれでいいにやん。たまに前の口調に戻るけど^ハ^ハ ゃ。」

「何十人の記憶があるからなー。それはどうしようもないんだが… 血を嘗め取るぬ^ハか… なんか怖いな、タオル渡したらそっちで拭いてくれるかな? おお、拭いてる拭いてる、可愛いなちくしう。」

「あの~ 幻影旅団ってなんですか? なんか怖そうな感じはあるんですけど…。」

「強盗集団、しかも警察どろか、世界を牛耳るマフィアでもビル^ハう^ハ強^ハの。」

「^ハ^ハ、全員高位の念能力者でバランスがいいから、チームを組まれたら神様でも殺しかねないにや。しかも神出鬼没で団長の欲望の赴くままに獲物を狩つていいく殺人集団にや。氣をつける^ハ^ハ、レアな能力とか貴重な物を持つてたら直ぐ来る^ハ^ハ。」

「…。」^ハ^ハ ふるふる^ハ

脅しかねたか？まあ、警戒しておいて損はないかな。それでも
戻るとしますか！マイホームにな！

「じ、あなたが行くんだ。」

「もうだこー。」

「あたしこひへー。」

「お前も来るんだよ。」

「えつーなんですかー？」

「あと君はマキオも恋人ポジションでやから。」

「それってビリもつじですかー…ちゅうちゅうと呑つ張らないで
くださいよーー！」

さてと仲間も手に入つたし、スパーを鍛えたらハンター試験でも
受けるかな？それより天空闘技場で金稼ぎか・・・まあ、さつさと
マークシングに戻つてゆくじょうかな？

外伝 極悪の華その2（後書き）

はい、23話でした。どうでもいいことですが、今日は新六部衆デッキにぼこぼこにされてしまいました。いやー、あの展開力はすさまじいですね。一回やつたなんですが、一回ともワンターンキルですよ。俺のレプティレスデッキが・・・こっちも強化されませんかね？遊星デッキには勝てるんですが・・・話は変わりますけど、1日一回更新してる人いるでしょう？あれってすごいですよね。わたしだったら、直ぐにネタに詰まつてペースダウンですよ。尊敬しますね・・・あとはエルシャダイの人気がまだまだ衰えませんね。そろそろ下火になつてくれないと困ります。買えないじゃないですか！私が！

最近は水樹奈々さんとか平野綾さんがすごいですね、いろんな意味で。でも声だと宮村さんが一番好きですけどね。エヴァのアスカ、ベルセルクのキャスカ、DODのフェアリーが特にいいですね。全部違った感じで胸厚すぎますね。

どうでもいいことですが読み切り版ベルセルクのヒロインが私的にナイスです。えっ？知らない・・・ネギまのエヴァに似てますよ。

II II II II II II II II II II

ヨークシンの外れ、ブレス社工業地区、少し昔は工業団地として多くの人が住んでいた。しかしブレス社の起こした汚職の数々が明るみに出て倒産してから一気に住民がいなくなつて場所で今では浮浪者が住み着いているらしい。

「ここが旅団のアジトなんですか？」

「予定だけど、まあ先にこっちが住んでしまえばあっちも他に行くと思うし（ヨークシンにはこういうところが多いからな。）あっこ辺の浮浪者には部外者の侵入報告や不審人物の監視とか情報収集をしてもらつてゐるから、みふゆ！見かけても殺すんぢやないぞ。

「はいはい、わかつたにゃー。」

何棟もある廃ビル群から状態がいい4階建てのビルを目指す。崩れてしまつたビルやそのビルの瓦礫、ツタが伸び、苔が生えたビルや円状の空き地を囲むように建つてゐるビルを越えて、目的のビルはかなり奥まつた所に建つていた。

「ビツ土足で入るんですか！？」

「ああ、埃とか「ミ」で汚いし、ビルだから靴のままじゃないと違和感があるだろ？？」

「確かに汚いですね・・・・・・だったら、掃除しましちゃうよー。」

「頑張れよ。」「ガンバにゃん。」

「手伝って下さこよー。」

スパーは必死にマキオを説得した。それはもう熱心に、思わずマキオが折れてしまうほどに。スパーにより、靴を脱いだ開放感を感じたい、日本人だったから置の素晴らしさを忘れない、キッチングが欲しい、トイレを完備してくれ、テレビやらゲーム、パソコンの必要性、ベットやクローゼット、タンス、デスクなど家具の重要性について数時間に及ぶ熱弁をされてしまった。

「ジエバン二（浮浪者）に頼んどいたから、終わるまで天空闘技場で修行するから。」

「・・・（ジエバン二？）こつてうりしゃい。」

「スパー、お前の修行だから。」

「ハハ嘘ー? そんな」と聞いてないですかよー。」

「今言つた。みんな一^ト行^フくぞ。

「（ジエバン）……一晩でやつてくれそつだ」や。）」

～天空闘技場、世界中の格闘家や腕自慢が集まる超高層タワー型競技場、上に行くごとに強者が集う修羅の螺旋になっている。20階からは念能力という特殊技能を持つ物の戦いになる。そしてフロアマスターになつたものには、自分の道場を開くことが出来る特典や豪華賞品、さらに高度1000メートル以上の別荘が与えられる。

・・・疑問に思つたんだが、念能力は秘匿されてるんじゃないのか？念能力でのバトルは一般人には見えないから面白くないんじゃない？200階選手の割には体術弱くねえ？とかは気にしてはいけない、きっと何か理由があるのだろう。

「天空闘技場よ！私は帰ってきた！」

「あれー？ マキオさんは」に来たことがあるんですか？」

「やっぱりハンター世界序盤の稼ぎ場所はここだよ。ここなら2

「00階にいつたら自動的に念能力を覚えられるし、金も入る、まさに聖地だね。」

「…念能力を覚えるってどうするんですか？」

一念能力でほこられる、大体の人は再起不能になります。

「ちよつとまつたああああーー無理！無理です、死んじやいますよ～・・・。」

「ちょっと痛いだけだよ、クフフ。」

「やつを再起不能つていつてましたよね！ イタツーちよつー引つ
張らないでー！」

天空闘技場に乗り込んだ二人と一匹、スパーが受付するため汗臭い面々と並び、耐えていた頃、マキオは何気にフロアマスターだったためにファンに囲まれていた。

途中ウイング達とであつたり、ラヴコメっぽいのが起きた気がしたがそんなことは無かつたぜ。スパーが上り始めて3ヶ月、やつと30階まで上がつた。

「ああ、スパーの右ハイキックが相手の側頭部にきまつたみたいだ。」

「うちのウイングもかなりやるさ。」

「そろそろ、念を起してやるでも大丈夫だと思へんたか」と、

「元々、暇つぶしに鍛えてたから、まあ潰れてもいいわさ。どっちの弟子が先に200階に辿り着くか勝負するかい？」

「ケフフ、100万ジユニー賭けよう！」

「うふふふふ、負けないよ。」

(二人共、ご愁傷様だにや。。。)

ウイングを暇つぶし（ハンターに成りたての人が念に気づいて教會に相談したら会長からじきじきに命令され、高位の念能力者が指導しなければならない）に弟子にして威力偵察に天空闘技場に出場させ、賞金はネコババしていたビスケットとマキオは話が弾み、ようく賭けをするようになっていた。

「じゃあ、念を起さずから其処に立つて。」

「ええっ！行き成り何なんですか！」

「あたしらも念を起すだわさ。」

なんとか纏（身体にオーラを留める技術だにや）をすることがで
き、3日ほど寝込んだ、スパーとウイング彼らに幸せが訪れるのだ

るつか？そして自重といつ言葉を彼方に置いてきたビスケとマキオはさらにどんな騒動を引き起こすのか！？

次回、他人の不幸は蜜の味だにや！そろそろ出番が欲しいにや！の一本立てです。（嘘）

外伝 極悪の華その三（後書き）

はい24話です。いやーなんかムカつくせつって何処にでもいるんですね。謝りに来たくせにガム食いながら足組んで「謝りに来た」ですよ。ふざけてますよ、うん、買いましたけどね、喧嘩・・・手首痛めました。

そんなことより相変わらず中身が薄いです。ビスケの口調も分からず、ウイングのキャラも崩壊氣味で自分の文才の無さに思わず、泣きたくなります。

ジョンウン、すごい刈上げですね。タラちゃんみたいで、ええ。
私はまさおの方が気に入っていますが。

臘村正の料理つて美味しそうですよね。紺菊さん綺麗です。

＝＝

天空闘技場200階、そこは念能力者の巣窟。ハンターライセンスを持たない、アマチュアが集う戦いの祭典。才能で目覚めた天然型能力者ではなく、先輩ハンターに師事し、たゆまぬ努力でえた養殖型ではなく、戦いの只中で研磨される修羅の道、さながら蟲毒の壺のように強き物だけが生き残ることができる。

「わあ！やつて参りました。バトルオリンピアチャンピオンシップ、二年に一度の大一番！全世界最強を決める戦いの火蓋が幕をきらうとしています！」

西と書かれた入り口からやってきた大柄な男、ぶ厚い甲冑に身を包み、その手には長大な大剣、剣と言うにはそれは、余りにも大きく、ぶ厚く、重く、大雑把すぎた、それは鉄塊だった。全身黒尽くめの大男がリングに上がってきた。

『西方からやって参りましたのは、今一番乗りに乗っています。ボイド選手！破竹の勢いでフロアマスターになつた彼は天空闘技場に来てから僅か2年でここまで這い上がつてきました。これは天空

闘技場最速記録でござります！その巨体に見合わない速さ、その手に持つ大剣でことごとく対戦相手を屠り然る姿はまさに人間風車！彼はどんな戦いを見せてくれるんでしょうか！』

対して東と書かれた入り口からやつてきたのは細身の男、羽織に袴、黒い髪を後ろで結い、観客に手を振る選手。素朴な顔立ちで人好きする笑みを浮かべた優男がゆっくりとリングに上がってくる。

『前回、前々回のバトルオリンピアの霸者！私達は見てきた彼が成し遂げた偉業を！天空闘技場史上最も激しかったあのトーナメントを！新人の彼が次々と優勝候補たちを退け、歴戦の猛者！オリンピア霸者！伝説の達人を打ち破った姿を！私達の目には焼きついています。250階のフロアマスター、マキオ選手がリングに帰ってきた！』

鳴り響く歓声、観客の声が怒号となり、一つの渦となります。

『さあ今ゴングが「オラアアア！」ボイド選手がゴングを待たないできりかかるう！』

会場に轟音が響く、ボイドがいきなりの切り下ろし。

「クフフ、堅の練りが甘いよ。」

『掴んでいるうーーー！あの大剣を片手で掴んだというのか！マキオ選手の足元が砕けてるのが分かるようすに相当な力で振り落としたのが分かります！』

「まだまだ修練が足りないね。教えてやろうつーコレがオーラの使い方だ！』

「ウオオリヤアアアアーー！」

「貧弱ー・貧弱うー！」

『ボイド選手構わずラッシュシュをするが！すごいすごいぞー・マキオ選手！ボイド選手のボイド選手の斬撃を全て殴り飛ばしていますー！』

「コレでも喰らええーー！」

『ボイド選手の大技！破軍粉碎波です！幾多の敵を打ち倒した飛び斬撃が爆風と共にマキオ選手に襲い掛かる！』

「オーラの練りが足りないし、収束も甘い、何より大雑把だ！」

『マキオ選手から放たれた一筋の衝撃！これは百歩神拳だ！そうです、マキオ選手にはこれがある！飛び道具を貫く一撃が！ボイド選手の大剣を碎きました！』

「チクショウー・負けられるかあああー！」

『コレはボイド選手の切り札！黒の鎧です！この状態になると我々の目では追いきれません！』

「ボイド、今度やる時もっと強くなれよー！これが俺の武の真骨頂ー！」

かつて史上最强に挑んだ男がいた、最终兵器と呼ばれた男の编み出した奥义、当てない打撃、想像によつて全身に関节を増やし、その関节で加速させた拳で一撃。

それをマキオがオーラを爆発的に出す《堅》を一箇所に溜める《硬》にし、それをオーラの高速伝達の技術である《流》でさりに強化した打撃にした。

爆発的なオーラの高まりと共に爆音が場内に炸裂した。

「羅刹拳だ！」

マキオに特攻したと思われる、ボイドの甲冑が砕け、倒れていた。

『えつーと、いま画像が乱れているんですが・・・』
『写つましたね。』

— — — ! ! .

場内に割れんばかりの歓声が鳴り響き、タンカで運ばれるボイドと退場するマキオ。

戦いが始まる6時間前、天空闘技場近くの商店街で

「ふつふうん、今日の「」飯は豚の生姜焼きにしようかな?マキオさん喜んでくれるかな。」

商店街を歩くスーパーがいた。どうやら夕飯の材料を買いに来たようだ。

「あつ、ペーマンが安い・・・ペーマンの肉詰めもいいかも、おじやーん！」

「えつ、はいはい、いらっしゃい。おー、スパーちゃんじゃないか！田那さん元気かい？今日、試合みたいだけだ。」

「田那さんだなんて、えへへ、へつ？しあい？」

「あれ？知らないのか、今日はバトルオリンピアの最後を飾る最強の挑戦者と今のタイトルホルダーのマキオの試合が午後9時からあつて、みんな心待ちにしてるんだよ！まあ、チケットはべらぼうに高いからオジサンはテレビで見るけどね。」

天空闘技場250階、フロアマスターであるマキオの部屋である。

「wwwうはwwwやべえwwwウイニングwww腕相撲強すぎwwwワロタwww」

「大丈夫ですか？」

「だらしないねえ、それでもチャンピオンなのかい？」

部屋で寛いでいた、マキオ、ウイング、ビスケ、みゆきは腕相撲でプリン争奪戦をしていた。結果はマキオの惨敗、ネコのみゆきにさえ負けてしまつという体たらくを披露していた。

「ちょっとー、マキオさん！今日試合だなんてなんで黙つてたんですか！」

「・・・ん？」

「・・・気づいてなかつたんですか？」

「こやんでこや？ あれだけテレビにマキオが映つていたのに、こに
やんで気づいてないのにや？」

「こ」の子は相当な大物になるだわさ。」

「あれ？ 皆さん知つてたんですね？」

一気に白けた空氣になつてしまつたが、マキオはスルーすること
にした。

「スパー！ 腕相撲で勝負だ！」

「いいですよ。えいつ。」

マキオはコロソと転がつて部屋から静かに出て行つた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

6時間後、マキオの部屋でテレビの前に座りながらスパー、ビス
ケはお菓子を食べていた。

「それから始まりますね。」

「出で来たね、このボイドって奴、試合で見たけど、かなりみた
いだわ。」

「そうなんですか？あつマキオさんですよ・・・すごい人気です
ね。」

「それもそうわざ、ここでマキオのこと知らないなんてモグリ確定・・・おお、氣合入ってるね、不意打ちだわや。」

『掴んでいるっーーー！あの大剣を片手で掴んだといつのかーマキオ選手の足元が砕けてるのが分かるように相当な力で振り落としたのが分かります！』

「まッマキオさん！・・・ふつ間一髪ですね！」

「いやいや、余裕で避けていたよ。」

「えつ、でも掴んでますよ？」

「あれは一回落ちたのを拾ったのさ、マキオの筋力とオーラじゃ、
相手の馬鹿オーラを打て止めるのは不可能に近いわ。」

『ボイド選手構わずラッシュをするとーすこしずこぞー・マキオ選手ー・ボイド選手のボイド選手の斬撃を全て殴り飛ばしていますー。』

「へー、あつすごいですよ、ほらーちゃんと止められるじゃないですか。」

「違うわさ、あれは相手が動搖してオーラが乱れて上手く周が出
来ていないから、からうじて硬で弾くことが出来るだけだわさ。」

『ボイド選手の大技！破軍粉碎波です！幾多の敵を打ち倒した飛び斬撃が爆風と共にマキオ選手に襲い掛かる！』『マキオ選手から放たれた一筋の衝撃！これは百歩神拳だ！そうです、マキオ選手にはこれがある！飛び道具を貫く一撃が！ボイド選手の大剣を碎きまし！』

「これもさつきと同じで相手のオーラが薄いと心を上手く収束したオーラで貫通しただけだわ。」

「ほんと、よく見ひるんですね。」

「……」のナセホントに心配だわや。」

『「レバボイド選手の切り札！黒の鎧です！」の状態になると我々の手では追いきれません！』

「ああ～、コレは不味いね。自分のリミッターを外す」とで強引に倒しに来たね。」

「速くし、田で追えませんよ~。」

「うー、耳がキーンとします。」

「試合はいつになつたんだわ？」

『えつーと、いま画像が乱れているんですけど・・・』
ボイド選手が倒れているということは・・・勝者はマキオ選手だー
――――――』

「良く分かりませんでしたね・・・あとで直接聞きましょうか?」

「やうだね・・・。」

外伝 極悪の華その4（後書き）

唐突にバトルパート、しばらくはバトルなさそうなんで無理に入れました。マキオの身体能力は一般人ぐらいです、周りのメンバーは人外レベルの身体能力です。ハンター世界ですから・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5631n/>

転生人生【極悪ノ道化】

2010年12月4日19時44分発行